新制國語

四

375.9
Hi19
資料室

42641
教科書文庫
4
810
51-1938
20000
63437

資料室

昭和十三年十二月二十日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用　實業學校國語科用

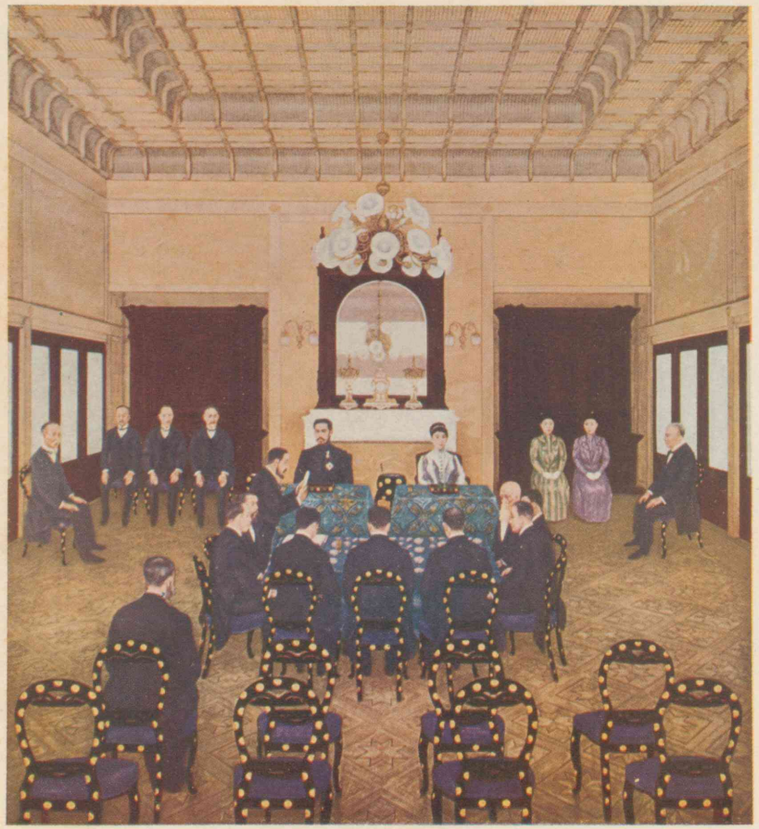
廣島高等師範學校
附屬中學校國語漢文研究會編

新制國語

修文館發刊

広島大学
教
63437
図書

3759
141193



（明治神宮外苑壁畫集）　　歌御會始

新制國語 卷四 目次

一 學者の苦心 芳賀矢一 一
二 郷里の言葉 窪田空穂 七
三 古名將の嗜 湯淺常山 一七
四 白露 正岡子規 伊藤左千夫 二三
五 聖德太子 高嶋米峰 二五
六 滿洲の黎明 松岡洋右 三一
七 揚子江の秋 南部修太郎 四〇

八　武藏野　國木田獨歩　四六
九　吾が家の富　德富蘆花　六二
一〇　乃木將軍　森鷗外　六五
一一　冬ごもり　相馬御風　七〇
一二　新年歌御會始　金子元臣　七六
一三　勅題和歌「田家雪」　八〇
一四　日本趣味　佐々政一　八三
一五　俳句に就いて　高濱虛子　九二
一六　城跡　正岡子規　一〇三
一七　尊德先生の幼時　富田高慶　一〇五

一八　天理人道　二宮翁夜話　一一六
一九　太陽の子　正富汪洋　一二三
二〇　弓矢の道　新井白石　一二六
二一　死して惜しまるゝ人となれ　嘉納治五郎　一三一
二二　湖畔の少年　前田夕暮　一三七
二三　今　市島春城　一五一
二四　蘭學事始　杉田玄白　一五七
二五　國語の愛護　五十嵐力　一七〇

——終——

芳賀矢一　國學者　文學博士　東京帝國大學教授
一　福井市の人　昭和二年十一月歿　帝國學士院會員
上田萬年　國語學者　文學博士　東京帝國大學教授
松井簡治　文學博士　東京帝國大學教授　昭和十年七月十二日歿　名古屋市の人
千葉縣の人　文學博士　東京帝國大學教授　理科大學
文久三年（一八六三）生

新制國語　卷四

一學者の苦心

芳賀矢一

十年一昔といふことを思ふと、上田・松井の二君が國語辭書の編纂に著手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晩餐會に招かれて打興じたのは、つい此の間のやうな氣もするが、其の頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に嫁いで人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今や其の第一卷が愈出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、

而もそれよりは大きい一種の喜悦を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極まりがない。此の一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や軍事や工業や貿易やの進歩發展の跡を見ても、其の間の十年は通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業は、かういふ中に、徐々に其の工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘出されて、選り分けられ、鑄分けられてゆく鑛石のやうに、幾萬幾十萬とも知れない古語や新語は、幾百部幾千部の典籍・圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインクで染められてゆく。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝

松井君の邸
東京市小石川區關口駒井町に在る

いて、暦も幾度か改る。同じ仕事がはてしなくいつまでも續く。傍から見れば、捗の行かぬことは齒痒いやうで、何時かたのつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸内の離れ家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦は間斷なく此の間に活動して、採るものは採り、棄てるものは棄て、其の進歩は遲いが、其の成果は確實であつた。かくて粒々積上げた砂子も遂には山を成す喩のやうに、編纂が稍緒に就いた迄には、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻となく進水式に浮かび出たのであつた。

學者の仕事はじみである。目覺しく世人を驚かすやうなことはない。二君が拮据十餘年の編纂事業も靜かな一室に

靜かに行はれたのである。けれども、一度其の室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人も其の難事業たることを承認せずにはゐられぬ。また編纂者の決心と根氣とを尊敬せずにはゐられぬ。さうして、それが決して學者の閑事業ではなくて、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査整理が、緊急な事業であることはいふ迄もない。國家は、軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に賴らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狹い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふ所に、學者の生命があり、學術の意義があるのである。

十年以前に比べて、鐵道の哩數や軍艦の噸數の大いに增加したのを祝賀する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦位で滿足してゐた我が國語界が、十餘年後の今日、こゝに一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物の整備するのは、國家の誇であり、精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民にとつての立派な强みである。此の一大產物が堅忍不拔な二君の手によつて成就せられたことは、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感ずる所以である。此の十年は、國語界に於ても亦無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業は、いつも世間と沒交渉のものではない。專心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目とな

るものである。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を、一日も餘所に見てゐる譯にはゆかぬ。十年一昔の間には、國語其のものの中にも、絶えず變遷が行はれてゐる。それに注意するだけでも容易の業ではない。靜寂な編輯室は、紛糾した實社會と常に相往來してゐるのである。

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、其の背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は今更述べるには及ばぬ。後世の人は、必ず之を、明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の滿足と喜悅を察知すると同時に、今か〳〵と十餘年を待暮した同友とともに、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮かべようと思ふのである。

（大日本國語辭典序文）

窪田空穗
名は通治
歌人
早稻田大學教授
長野縣の人
明治十年生

二　鄕里の言葉

窪田空穗

私は鄕里を離れて三十年そこ〳〵であるが、今、その當時の言葉を思ひ出さうとしても、空で思ひ出し得るものは、その中の一部に過ぎない氣がする。言はれゝば直に思ひ出してなつかしく感ずるが、自分からはもう言へなくなつてしまつてゐる。近年たま〳〵鄕里へ歸つて見ても、そこに使はれてゐる言葉は、かなり國定教科書風になつてしまつてゐることを思はせられる。明治二十年代に使はれてゐた古い言葉を忘れてしまつたのは、旅に過してゐる私だけではなく、その同じ土地に暮してゐる者でも、或は忘れがちなのかも知れない。又、そこに暮してゐる者の大部分は、明治二十年後に生まれた

春日政治　國語學者　九州帝國大學教授　長野縣の人　明治十一年生

奈良文化　上代文化の研究雜誌

信濃　信濃國（長野縣）

萬葉時代　萬葉集の歌の成つた時代　仁德天皇時代より奈良朝時代後期まで

藤原御井歌　藤原宮御井歌　萬葉集卷一所載の長歌　作者未詳

人である。それらの人は、忘れるまでもなく、てんで、初から覺えなかつたらうと思ふ。

言葉とは言つても、一度も文字になどは寫されたことはないものである。口から耳へだけのものである。今私が思ひ出して見ても單語にとゞまるものである。あつけない氣がする。しかし、書留めようとすれば、單語としてよりは觸れにくいものである。

春日政治氏が、「奈良文化」の誌上で、信濃に殘つてゐる萬葉時代の言葉を二つ紹介されたことがある。それは讀まない人があらうと思ふから取次ぐことにする。

「藤原、御井歌」で、宮の四門を守る山々をいつてゐるところに、南方に當つて立つてゐる畝火山を、

成務紀　日本書紀卷第七

伊那地方　長野縣上伊那郡・下伊那郡地方

松本地方　長野縣松本市地方

畝火の　この瑞山は　日緯（ひのよこ）の　大御門に　瑞山と　山さびいます

といつてゐる、その「日緯」の訓みである。諸註、今の訓みをするについて、成務紀の「以（テ）東西（ヲ）爲（シ）日（ノト）縱、南北（ヲ）爲（ス）日（ノト）横」を唯一の依據としてゐる。「よこ」と訓み又は「ぬき」と訓むのは、文字に從へば「よこ」であり、「縱」に對させれば「ぬき」である。それで定めかねるのである。春日氏は、信濃の伊那地方では、太陽が南に廻つて來た時を「日ののき」といつて、今日でも口語として使つてゐるといはれ、「日緯」はまさしく「日のぬき」だといふことをいはれてゐた。

これは伊那地方だけではなく松本地方でもいつてゐた。明治二十年代、私の祖母のゐる部屋へ來る女客は、その時が冬

で、ちやうど太陽が南へ廻り、部屋が暖な時だと、時候の挨拶として、

「日ののきは、何てお暖なことでござんしず。」

と言ふのがきまりになつてゐた。その他の場合でも、よくこの言葉を耳にしたものだ。

松本地方でいふ「日ののき」は、太陽が南に廻つた時刻の意で、ある。萬葉集では方向としてである。それは意味の轉じたものである。猶「ぬき」を「のき」といふ轉じ方も普通で、機を織る時の「緯絲」を「のき絲」とのみ言つてゐた。言ひやすい爲に轉じたのである。

又、萬葉集には「始水」「先水」といふ文字を使つた歌がある。この訓みが、何と訓むかで疑問となつてゐる。意味は文字から

推して、川の水の始に流れて來る水、又は先に立つて流れて來る水とは分るが、「始」「先」を何と言つてゐたものか、なまなか二樣に宛ててある爲に、却つて疑を起させたのである。春日氏は、同じく信濃の伊那地方に殘つてゐる言葉として「はなみづ」と訓むべきだといはれてゐた。

この言葉も、伊那地方ばかりでなく松本地方でも使つてゐた。今でも使つてゐよう。この「はな水」といふ言葉を見ると、その「はな水」の狀態があり〳〵と眼に浮かんで來る。それは印象的なものである。

春、農村でそろ〳〵米作に取りかゝる準備をしようとする時、第一にすることは、田に水を引く溝の手入である。秋から冬の間にそれらの溝は埋まつて淺くなり、又、岸が崩れたり、も

ぐらに穴をあけられたりしてゐるのが普通である。手入をしてそれを繕ふのは第一の仕事である。暖い日、さして骨も折れない其の仕事をしてしまつて、水の上り工合、流れ工合を試す爲に、その溝と小川との堺、卽ち溝の爲の上げ口が、これまた埋まつてしまつてゐたのを最後に掘ると、小川の水は溝へ流れ込んで來る。その水は勢よく躍つて、溝に自然に殘つてゐる芥を押流しつゝ流れて來る。この水の最初の水が、卽ち「はな水」なのである。文字に宛てたら「始水」とも「先水」ともすべき水である。

仕事を始めることを「仕事をはねる」といふ。始つてゐなかつたことを「はなつてゐなかつた」といふ。これらは極めて普通な言葉で、始めるといふ言葉は、餘程改つた場合などには使

つたかも知れないが、殆ど記憶にないものである。「はな水」もそれと同じ親しさを持つたものであつた。

子供の頃、後で思つて品の悪い悪戯だと心附くやうなことをした場合には、祖母は「はしたねえことをするな」といつて叱つた。「はしたねえ」は「はしたなき」である。平安朝の文獻によく出て來る言葉で、註釋者が語源をいはうとして多くの言葉を費すものである。今使つてゐるかどうか。その當時には普通の言葉であつた。

お彼岸とか歳暮とかに、近親間で、單純な配り物をし合ふ時など、使は子供がすることになつてゐた。

先方の口上はきまつてゐた。

「お笑止でござんしたつてね。――お忝(かたじけ)ね。」

「お笑止」といふのは、家へ對しての口上である。氣の毒の意で、配り物をしてくれたことに對する謝意である。「お忝」は使の勞に對してである。

後に、文字としてのこの「笑止」を見て、言葉と文字とそろはない感じがした。人の、可笑しいといふ意味で笑止といふ文字を使ふのを見て、同感もし滑稽にも思つたのであつた。私たちに取つては、まがふやうもなき日常語だつたのである。「忝」などいふ言葉も、有難うといふ言葉よりも、より多く情愛のある、隨つてより多く自然な言葉として、幼少の、私たちには響いたのであつた。かうした古さを思はせる言葉は、考へればまだ思ひ出せるやうであるが、既に我面白に過ぎる氣がする。今はやめる。

かう思ひ續けて來ると、奈良朝・平安朝・鎌倉室町時代を思はせる言葉が多いのに、江戸時代を思はせる言葉が案外にも少い。江戸時代の言葉もそれらの延長だ。特別な言葉がなかつたのだといへもするが、さうばかりも思へないことがある。

他國人は、「信州のずら〳〵言葉」といつて笑の材料にする。「ずら」は「だらう」といふと同じく、想像をあらはす助動詞である。さうだらうと思ふといふところを、「さうずらと思ふ」といつてゐる。餘程耳に附くと見える。その「ずら」は「ずらん」の轉訛で、鎌倉室町時代では普通のものだ。又、「ずか〳〵言葉」ともいふ。この「ずか」も同じ意味で使はれてゐる。「明日は行かうと思ふ」といふのを、「明日は行かずかと思ふ」といつてゐる。この「行かずか」は、「行かんずらんか」の約つたもので、同じく鎌倉室町時代

の言葉である。名詞は變へようと思へばたやすく變へられるが、動詞殊に助動詞のやうな、發音の調子と密接な關係をもつて、これとそれと一つになつて直ちに感情となつてゐるものは、變へようにも變へられない。この意味で、私の郷里は江戸時代の影響よりも、三百年を飛越えた鎌倉室町時代、或はそれ以前の時代の影響の方が、より多いやうに思はれる。もし中央の政治と農民との關係を調べて見ようとする人があつたならば、かうした事も一つの資料にはなり得ようといふ感じがする。

（空穂隨筆）

二考期

湯淺常山
名は元禎
岡山藩士
儒者
岡山の人
天明元年（一七八一）歿
年七十四

太田持資
號は道灌
室町時代の武將
文明十八年（一四八六）歿
年五十五

上杉定正
扇谷家第六代の主
明應二年（一四九三）歿
年五十二

七重八重の歌
兼明親王

三學期

三　古名將の嗜

湯淺常山

太田左衛門大夫持資は上杉定正の長臣なり。鷹野に出でて雨に逢ひ、或小家に入りて、「蓑を借らん。」と言ふに、若き女の、何とも物をば言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、「花を求むるにあらず。」とて、怒りて歸りしに、之を聞きし人は、「それは

七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだに
なきぞ悲しき

といふ古歌の心なるべし。」といふ。持資驚きて、それより歌に志を寄せけり。

定正、下總の廳南に軍を出すとき、「山涯（ハタ）の海邊を通るに、山の上より弩を射懸けられんや、又潮滿ちたらんやはかり難し。」

下總の廳南　今の千葉縣長生郡廳南町字長南宿に廳南城があつた

とて危みけり。をりふし夜半の事なり。持資「いざわれ見來らん」とて馬を馳出し、やがてかへりて「潮は干たり」といふ。「いかにして知りたるや」と問ふに、

遠くなりの歌　僧曉月（冷泉爲守）

「遠くなり近くなるみの濱千鳥なく音に潮のみ
ちひをぞ知る

と詠める歌あり。千鳥の聲遠く聞えつ」といひけり。

又、いづれの時にや、軍を返すとき、これも夜の事なりしに、利根川を渡らんとするに、暗さは暗し、淺瀨も知らず。持資、また

そこひなき歌　素性法師

「そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀨にこ
そあだ波は立て

といふ歌あり。波音荒きところを渡せ」と言ひて、事なく渡しけり。

蒲生氏郷　織田信長・豐臣秀吉に仕へた武將　文祿四年（一五九五）四十

細川忠興　織田・豐臣に仕へ後家康に從つた武將　正保二年（一六四五）八十二

なき名ぞとの歌　讀人知らず

伊勢松阪　今の三重縣松阪市

會津　福島縣の西部地方

安達　今の福島縣安達郡

黑塚　安達郡太平村の安達が原にある古跡

伊達政宗　德川時代の武將　陸前國（宮城縣）仙臺の城主

蒲生氏郷の許に、佐々木が鐙といへる名高き器あり。細川忠興、いと懇に「我に賜はれ」と乞はれしかば、亘理某「是は世久しく傳はる物にて候。似たる鐙を贈り給へ」といひければ、氏郷、

「なき名ぞと人にはいひてやみなまし心のとは
ばいかが答へん

といふ歌の恥づかしきよ」とてかの鐙を贈られけり。

氏郷、伊勢松阪十二萬石なりしが、後會津を賜はりける時は四十歳の頃なり。安達郡に川あり。向かふに黑塚あり。安達は氏郷の領地なりしに、黑塚は伊達政宗の領地なりとて爭のありしが、氏郷「平兼盛の歌に

みちのくの安達が原の黑塚に鬼こもれりといふはまことか

寛永十三年（一六三六）歿年七十
平兼盛　平安朝の歌人　正暦元年（一五〇）歿
みちのくのの歌拾遺集
田邊城　今の京都府加佐郡舞鶴町にあつた
幽齋　名は藤孝　戰國時代の武將　歌人　慶長十五年（一六一〇）歿年七十七
爲家卿　藤原爲家　鎌倉時代歌人　續後撰集・續後撰集・古今集の撰者　建治元年（一二七五）歿年七十九
桂光院智仁親王　後陽成天皇の御弟　寛永六年（一六二九）歿

と讀めることあり。いかに」と申されしに、聞く人「黑塚は安達が原に屬したること分明なり」とて、政宗も爭をやめてけり。

大阪の軍兵一萬七千を以て田邊の城を攻む。細川忠興は奥州に赴き、父幽齋、城にあり。三刀谷孝和大剛の人にて、度々切つて出で防ぎ戰ふ。幽齋、和歌に長じたる人なり。古今集の祕訣、爲家卿の記されしを、殊に祕藏せられしが、兵火の爲に焚けん事を桂光院智仁親王慮らせ給ひ、使を以て「彼の古今集・源氏物語を禁裏に參らせよ」となり。則ち其の書を奉るとて、

いにしへも今もかはらぬ世の中にこゝろのたねをのこす言の葉

又、烏丸光廣卿の許へ封じたる歌書をやるとて、

●もしほ草かきあつめたる跡とめてむかしにかへせ和歌のうらなみ

御年五十一　古今集　二十卷　勅撰集の第一撰者紀貫之等
源氏物語　五十四帖　平安朝中期に成つた物語　作者紫式部
烏丸光廣卿　歌人　寛永十五年（一六三八）歿年六十
前田德善院　前田利家　德川時代の武將　慶長四年（一五九九）歿年六十二

かゝる處に、前田德善院を禁裏に召し、田邊の城攻、和平の事を勅命ありければ、寄手圍みを解きて、幽齋、城を出でられけり。光廣卿、幽齋の許より送られし書、未だ封を開き給はざりけるが、かへし、

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたゝびかへす浦島のなみ

幽齋、返しに

浦島やひかりをそへて玉手箱あけてだに見ずかへす波かな

（常山紀談）

四白露

正岡子規

庭中の松の葉に置く白露の今か落ちんと見れども落ちず

◉縁先に玉巻く芭蕉玉解けて五尺のみどり手水鉢を掩ふ

●くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

正岡子規
名は常規
歌人　俳人
松山市の人
明治三十五年
歿
年三十六

瓶にさす藤の花房みじかければたゝみの上にとゞかざりけり

病みて臥す窓の橘花咲きて散りて實になりて猶病みて臥す

伊藤左千夫

鶏頭のやゝ立亂れ今朝や露のつめたきまでに園さびにけり

伊藤左千夫
名は幸次郎
歌人
千葉縣の人
大正二年歿
年五十

おく山にいまだ残れる一むらのあづさの紅葉
雲に匂へり

◉人の住む國邊を出でて白波が大地兩分けしは
てに來にけり

高山も低山もなき地の果は見る目の前に天し
垂れたり

白波やいや遠白に天雲に末邊こもれり日もか
すみつゝ

五　聖德太子

高嶋米峰

高嶋米峰
宗教家
評論家
東京市の人、
明治八年生

聖德太子
御名は厩戸皇子
用明天皇の第一皇子
推古天皇の二十九年（六二一）
薨
御年四十九

私の最も崇敬する哲人を過去に求めて、私はまづ聖德太子を擧げざるを得ない。聖德太子の偉德・鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙のよく盡くすところでない。憲法十七條を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とすることの切要なのを認め、更にこれに依つて、天皇中心主義を闡明して、建國の精神を振作し、また官位十二階を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、内政を充實し給うたので、日本の面目はこゝに全く一變するに至つたのである。これが爲に當時世界の最大强國として、最も文化の進歩した支那

小野妹子　推古天皇の御代の朝臣　池坊立花の祖

隋　支那の國號（三四一—三七七）

煬帝　隋の始祖文帝の次子

——支那は恐らく日本をその屬國ぐらゐにしか考へてゐなかつたであらう。それ程に日本の世界的地位は低いものであつた。——と對等の國交を結ぶことになつたといふのは、實に聖德太子の偉大なる功業である。

聖德太子は推古天皇の十五年に、遣隋使發遣のことを決定し給ひ、小野妹子が使節に任ぜられて、その年七月に出發した。この年は隋の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す、恙なしや。」とあつて、實に堂々たるものであつた。從來支那は自ら中國を以て任じ、東夷・南蠻・西戎・北狄と、四方の國々を野蠻國あつかひにしてゐたので、日本の如きも所謂東夷の中の一つぐらゐに考へてゐたのであらうが、その日本から、突如とし

難波　今の大阪市附近

江口　淀川の河口

てかうした對等な禮を以て書を贈つたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのである。が、しかし、これほどの國書を差出す國は一體どのくらゐな文化をもち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう、裴世清といふものを使者として我が國に遣はす事となり、裴世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に著いたのである。この隋使裴世清の報告が、日本と隋と對等なものにするか、それとも依然として屬國あつかひにするかといふ最も重要なものであつたので、聖德太子はその待遇については、頗る心をお籠めになつたらしい。まづ朝廷では飾船三十艘を以て難波の江口に迎へ、難波の新館をその旅館に充てて、優遇至らざるなく、また彼が都に入る時には、飾

大和　大和國（奈良縣）
海石榴市　今の奈良縣磯城郡三輪町字金屋にあつた市

騎七十五疋を以てこれを大和の海石榴市の衢に迎へさせた。天皇の謁を賜うた時には、有司百官が、定められた冠位に隨つて綺羅星の如く宮廷に居並んだといふので、さすがの斐世清も、すつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が歸國の時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣はすこととなつた。その時妹子の持つて行つた國書は、やはり聖德太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。さすがの隋の煬帝も、斐世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらで、もう否應なしに、對等な國交を結ばなければならないことになつて、支那は日本を完全な獨立國として認めたのである。これ實に聖德太子の理想の一面が、遺憾なく實現したのであつて、我が國が金甌無缺の國體を維持し得られたのも、これ等に淵源するところが頗る多いのである。

聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奬勵でも、歴史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、曆法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは卽ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは卽ち佛教の興隆、最も華やかなものは卽ち日隋對等の國交であつて、これ私が哲人として崇敬し讃嘆し奉る所以なのである。

惟ふに、日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帶びさせられた方は、僅かに御三方しかましまさぬ。しかも、其の中の御二方が、二十歳代の青年でこの大任を帶びさせられたことは、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。その御三方と

中大兄皇子
舒明天皇の皇子
後の天智天皇

申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖德太子、齊明天皇の攝政皇太子中大兄皇子、及び今上天皇にましまし、聖德太子は二十歳、中大兄皇子(後の天智天皇)は三十歳、そして今上陛下は二十一歳の御時に、攝政の大任を帶びさせられることとなつたのである。聖德太子攝政の時代には、日本が內に充實し外に躍進したといふ事實に考へ合はせても、昭和の日本はどうしてもまた、我が聰明英邁にわたらせられる今上陛下の御威德によつて、更に一段と內に國力を充實し、外に國光を發揚すべきことを確信せざるを得ないのである。

五族
漢・滿・蒙・回・藏の五民族

松岡洋右
政治家
南滿洲鐵道株式會社總裁
山口縣の人
明治十三年生

六 滿洲の黎明

松岡洋右

光は東方よりといふが、正に滿洲大陸の黎明は來た。同胞の大陸發展の第一夜は明けたのである。約半世紀の永きたゆまざる努力によつて、こゝに東亞の諸民族が、東方の文化と道德の華を咲かし、實を結ぶべき路は拓けた。眠れるアジヤの魂魄をふるひ醒まし、皇道を大陸に伸べるのは、曠野の先驅者諸君の任務ではないか。

父祖の血しほに染められたこの地、英靈十萬の護るこの地、こゝに諸君の貴き汗をしたゝらし、その鍬を深く打込むことによつてのみ、曠野の永き眠はさめるのである。こゝにこそ、眞の意味の滿洲の黎明は來る。これから五族の新生活が展

開されるのである。

今、滿洲の天地は、王道を以て國是とし、五族協和を以て建國の理想とする吾等の盟邦である。王道主義とは共榮主義だ。天に順ひ人に應ずるを以て理想とするから、順天主義ともいへるであらう。だから諸君は、こゝに住むすべての人々と和衷協力し、共に住み共に良き天地を創造しなければならぬ。諸族相結び、相侵すことなくして、共に榮えることが人類の理想ではないか。人類史あつて以來、聖者哲人の考へたことは、皆この理想を如何にして地上の人間に行はしめるかに在つた。而して、未だ曾て一日もこの日は來なかつた。今や、光は東方より來つて、永き大陸の闇を除き、こゝにまづ王道實踐の搖籃にして、同時にまた民族協和の道場を開いたのである。

この意味に於て、面積百三十萬平方粁の滿洲大陸は皇道實踐の道場なのだ。或意味では、日本人の指導能力の試驗場であるともいへる。

私は道ふ、「先づ近くを治めよ、先づ隣を愛せよ。然らば遠きものも自ら靡き服するであらう。」と。この意味に於て吾等は全力を竭くして、盟邦の建業を扶けなければならぬ。諸民族との融和協調を怠つてはならぬ。足許が固まらぬのに、よそ見をするやうでは何事も成就はしないものである。事の成るのは、成るの日に成るのではない。

新　京（日本橋通）

汗は滴る
鋤禾日當午。
汗滴禾下土。
誰知盤中飧。
粒粒皆辛苦。
（李紳）

今私は聲を絞つていふ。

滿洲に移住してこゝを諸君の鄕土たらしめようとする、親愛なる吾が青少年諸君。諸君は、かりそめにも不成功を懸念するな。吾が向かふ所必ず成功ありと信じて來れ。而して、諸君の鍬をこの大地に強く打込め。滿蒙の大地は歡呼して諸君を迎へるであらう。更に諸君のその貴き汗の滴りによつて、こゝに新しい諸君のふるさとは開けるであらう。汗は滴る禾下の土、粒々これ辛苦。諸君こそは皇道の大陸的輸血者なのだ。幾十年放棄された曠野は諸君を待つてゐるのだ。野は喚ぶ「よき開拓者によつて開かれん。而してよく拓くものにはよき秋の實のりあらん」と。

次に、諸君は祖先と共にこの地に來ることを忘れてはならぬ。家門と家格を背負うて、こゝに來ることを忘れてはならぬ。父祖の位牌を胸に懷いて、父祖の魂魄を心肝に宿してここに來るのだ。しかして、建國以來、日東日出づる聖天子の國の蒼生として、忠良なる臣民として、其の鴻恩に浴し、臣子の分を盡くし來れる祖先の靈と共に、この地を拓くのだ。從つて諸君の家は最新にして最古だ。そしてまづ安らかなる墳墓の地を定めるのだ。忠心孝志ある者に非ざる限り、萬難を排して先驅者の任を果すことは出來難い。祖先と倶に移り住むといふこの決心は肝要である。諸君は現にその鄕村に於て見るであらう、祖先の祀も絶え勝な家門にして、よく榮えるものの少い例を。又家をはづかしめる子孫の多き家にして、よく鄕黨に誼あるものの乏しい事實を。

人はよく滿洲は寒いといふ。氣候は惡いといふ。これが、滿洲移住を鈍らせ、雄心を阻むものらしいが、事實滿洲は內地よりは寒い。が、それは日本の自然が惠まれ過ぎてゐるからで、シベリヤや、外蒙等に比べたら、實に住みよい天地なのである。殊に日本人は、寒さを怖れ過ぎること全く必要以上だ。滿洲に在る日本の子供達は、親達よりはずつと平氣でゐる。早く寒くなつてくれ、もつと寒くないと面白くないといふ。子供達は氷滑がしたいのだ。これ位の寒さは、實は

滿洲の曠野

北海道や青森あたりにもあるのだ。滿洲の寒さなどは案外なものだと、寒さを樂しむ心になり、この天與の冬閑期に春の準備をし、勉强でもやらうと勇んで居れば、實に有難い農家の冬になるのである。喜ぶ心、樂しむ心は一向に寒さを感ずるものではない。この滿洲でも、冬中足袋もはかずに通した人さへあるのである。特に寒い國には、それだけに便利な保溫設備が、永い間の經驗で備つてゐる。溫突（をんどる）等がそれだ。朝鮮人も滿洲人も、安價で氣持の良い採煖保溫の工夫をして、のどかに冬を暮してゐる。表は粉雪を捲いて風が呻らうとも、家の中は、日本に居るよりもずつと暖い。住居も、衣服も、案ずる事はない。

春から秋へかけての滿洲は實に惠まれた天候が續く。春

月は東に
榮の花や月は
東に日は西に
（谷口蕪村）

さき、いさゝか蒙古からの埃の立つ日もあるが、これらは洗へば落ちる砂ほこりで、物の數ではない。澄空一碧、杏咲き梨の花咲く春もよく、更に山峽には鈴蘭や山芍藥が咲亂れ、晩春より初秋にかけての山野一面は、文字通りに百花繚亂である。

陸より出でて陸に入る日の美しさ。夏はからつと晴上つて、ぐん〳〵と草木は伸びる。內地の樣にじめつかないし、いさゝか蠅や虻は居つても、眠氣ざましと思へばよい。

それよりも諸君。月は東に日は西に暮れゆけば、涼風早くも野に滿ちて、曠野の月はしづくするばかりのすが〳〵しさである。瓜はうまく、西瓜は割るべし。ひねもす野に働いた家人が、先づ汗を拭ひ、相集つて冷たい井戸に浸して置いた、自作の畑の物を割裂いたらどうであらう。秋はまた爽涼そのもので、飛雁空を渡り、稻は黃に、豆高粱はみのる。慌しいけれども豐かな收穫の秋ではないか。

これが諸君の新鄕土滿洲の素描である。

樹木が少いといふ。これは事實だ。しかしこれは、諸君が眞先になつて植ゑるべきだ。諸君の植ゑた樹が、亭々として天を摩して立つ時、これこそ滿洲に日本の根が生えた時だ。諸君の造つた家を巨木が取圍み、夏は陰なす青葉の葉ずれが聞える時、諸君の家門は榮え、新鄕土色が、その土の色にも滲み出るであらう。更に諸君によつて遷し祀られた鎭守の社に、樹木森々と生ひ茂り、神詣でする諸君の子孫の跫音が木の下闇を傳ひ、拍手の音が深寂たる神域に響き渡る時こそ、諸君の鄕土に永久の和樂があるのである。

（滿鐵を語る）

南部修太郎
小説家
仙臺市の人
昭和十一年歿
年四十五

揚子江
支那本部の中央を東流する世界第四の大河、長さ約五二〇〇粁

江蘇平野
支那江蘇省にある平野

揚子江の下流
杭州
支那浙江省北部の開港場

蘇州
江蘇省東南部の都會

南京
江蘇省西南部の都會

岳陽丸
日清汽船株式會社の所有汽船

七 揚子江の秋

南部修太郎

廣くおほどかな其の姿、黄泥の水の悠々たる其の流、自然の美と詩情との豊かな江蘇平野の蕭條たる秋の眺を恣にしながら、あの揚子江を下つた一日一夜を、私は今もなほ感慨深く思ひ浮かべる。

杭州に靜雅な西湖の勝を探り、水の都蘇州を訪ねて、城内から遠い城外の幾つかの史蹟を巡り、更に南京を訪れて、荒廢した舊都の寂しい姿に、人事のはかなさを深く感じさせられた私は、其の南京城外の下關(シヤクワン)から、岳陽丸の客となつて、南支那の最後の旅路を上海へと下つたのであつた。

南京に過した其の前日は、寥落の都にふさはしい時雨模様

上海
江蘇省江南の東部、黄浦江の江口にある開港場

浦口
江蘇省の河港

西湖

の曇日であつたが、それは一夜のうちに名殘なく晴上つて、其の日は大陸の秋らしく、空は紺青深く澄渡り、やゝ黄色みを帶びた光も明かるく朗かであつた。さうして赤煉瓦の建物や工場の煙突の立つてゐる對岸の浦口(ブカオ)の町、振返る南京城外の獅子山や鍾山の眺もくつきりとしてゐて、湖岸の蘆荻が靜かな風にさや〳〵と戰いでゐた。

流れてゐるのかゐないのか殆ど分らないやうな、靜かな水面を滑るやうにして、岳陽丸が上

流の方に其の瀟洒な姿を見せたのは、恰も正午時分であつた。私は埠頭階上の乘船口からすぐ船に乘込んで、定めの船室に荷物を置いて來ると、また上甲板に引返して、手摺に倚りながら棧橋の方を眺めてゐた。其處には支那人ばかりの三等船客や、荷役を爭ふ苦力が、大勢で卑しく騷がしくひしめき合つてゐた。其のぶざまさに不快な氣持をそゝられた私は、視線を反らして、反對の甲板の方に足を向けながら、船の高みから見ると、一層ひろ〳〵と一層明かるく開けて見える江の景色に眺め入つた。程もなく、鈍く尾を引いた汽笛が鳴り響くと、船は緩やかな船脚で、いつともなく埠頭を離れてゐた。

川の船路とはいへ、船は白塗の姿の麗しい三千餘噸の岳陽丸である。さうして其の大船を輕く波上に浮かべて、黃に濁

る水の靜かに流れ行く揚子江、川幅は時には五六町に廣がり、時には二三町に迫るが、曲折も大きくなだらかに、船は其の間を機關の音も微かに、小搖るぎもせずに進み下つて行くのであつた。さすがに秋である。湖岸に美しく戰ぐ蘆荻も、所々うつすりと黃ばんでゐた。草を食む水牛の群、すく〳〵と群り立つポプラの木、垂葉の綠深い楊柳の陰に憩ふ牧童の姿、此等は何れも江岸の好ましい眺である。岸近くに立つ丘陵の頂に時々見える苔の蒸した朽ちくづれたやうな、幾つかの古塔の姿は、何れも其の昔榮えては又いつともなく亡びた、帝王たちの豪華な夢を物語るものであらう。杭州の雷峯塔、蘇州の北寺の塔や虎邱の塔、上海の郊外の龍華寺の塔などと、それぞれ傳說を持つさういふ古塔の姿を、江蘇一帶に幾つともな

く見ることができるが、殊に江岸に眺められる此等は、今も昔も變りなく流れて行く長江の水に對して、人事のはかなさ寂しさを感じさせずにはおかない。　五十哩ほどを四五時間で下つて、船が南岸の鎭江（チンチヤン）に投錨したのは、もう黃昏の頃で、江上を吹く靜かな夕風も、何となく肌に冷やかだつた。

船は又いつともなく埠頭を離れて、蕉山島の影を左にしながら、靜かな波の間を滑るやうに進んでゐた。　私は甲板の手摺に倚つて、思はずも異鄕の旅人らしい感傷を誘はれながら、一人江岸の夜景に寂しい視線を投げてゐた。　颯々たる冷たい夜風、柔かな機關の響、靜かな船の蹴波の音。　江の幅は次第に廣くなつて、岸邊の蘆荻も闇のなかに吸はれてしまひ、三日月の影もいつともなく遠くの山の端に隱れて、空高い星の光

哩　一哩は約一・六〇九粁
鎭江　江蘇省の河港
蕉山島　鎭江の東北で揚子江中にある

だけが獨り冴えて、夜は漸く更けて行つた。　總べては何といふ感慨深い情景であつたらう。

思へば、有史以來三千餘年、或時は榮える帝王・宮嬪の豪華な宴の畫舫を浮かべ、或時は醉詩人をして秋の月明を樂しませ、或時は傷ましい敗將の涙を誘ひ、溯る人、下る人をして、數奇多樣の感慨を催させたに違ひない長江の水、人生のあらゆる有爲轉變を餘所にして、流れて盡きず、盡きず流れて三千二百餘哩、今もなほ黃泥の水悠々と、其の偉大な姿を私の眼前に蜿蜒と延べてゐる。　私は暫く視線を伏せて、暗い水の面に眺め入つてゐたが、自然の悠久に對して、人生の短さ、はかなさを今更のやうに感じさせられて、思はず瞼の潤むのを禁ずることができなかつた。

（揚子江の秋）

國木田獨歩
名は哲夫
小説家
兵庫縣の人
明治四十一年
歿
年三十八

武藏野
關東の大平原
南は相模野、
北は利根川、
西は秩父・甲
斐の連峰に境
する

十數里
一里は約四粁

秩父嶺
埼玉縣西境の
秩父地方の山
山

八武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野は、萱原のはてなき光景を以て絶類の美をならしてゐたやうにいひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。卽ち木はおもに楢の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新綠萌えいづるその變化が、秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠蔭に、紅葉に、さまざまの光景を呈するその妙は、ちよつと西國地方又東北の者には解し兼ねるのである。自分は屢〻思うた。もし武藏野の林が楢の類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な、變化に乏しい、色彩一樣なものとなつて、さまで珍重するに足らないだらうと。

楢の類だから黃葉する。黃葉するから落葉する。時雨がさゝやく、風が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かの如く遠く飛去る。木の葉落ちつくせば、數十里の方域に亙る林が一時に裸になつて、蒼ずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の記に、「林の奥に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想す」と書いた。この

國木田獨歩

耳を傾けて聞くといふ事が、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば林の中より起る音、冬ならば林の彼方遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の陰、林の奥にすだく蟲の音。空車、荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹶ちらす音。これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦づれで遠乘に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠ざかり行く。獨り寂しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音。自分が一度犬を連れて近處の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を讀んでゐると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとにねてゐた犬が耳を立てて、

中野・澁谷・世田谷　今の東京市中野區・澁谷區・世田谷區

きつとそなたを見詰めた。それぎりであつた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗の樹も隨分多いから。

もしそれ時雨の音に至つては、これほど幽寂のものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつてゐるが、廣い廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り行く時雨の音の、いかにも幽かで、又鷹揚な趣があつて、優しくゆかしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は曾て北海道の深林の時雨に逢つたことがある。これはまた人跡絶無の大深林であるから、その趣は更に深いが、その代り武藏野の時雨の更に人なつかしく囁くが如き趣はない。

秋の中頃から冬の初、試みに中野あたり、或は澁谷・世田谷、ま

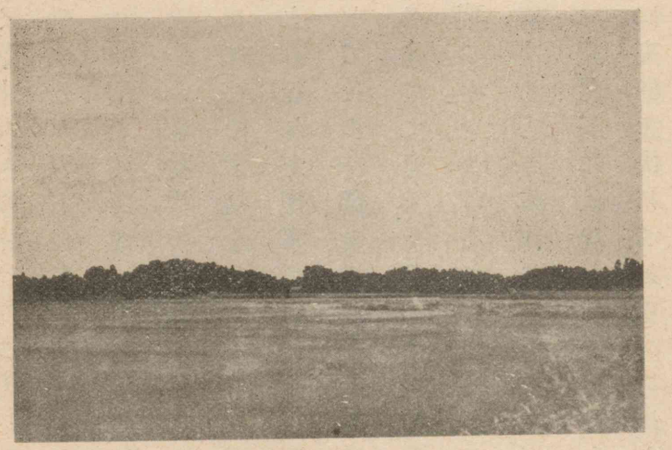
小金井
東京府北多摩郡小金井村

熊谷直好
國學者
周防國（山口縣）の人
文久二年（一八六二）歿
年八十一

たは小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲を休めて見よ。　これ等の物音忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて微かな音をし、それも止んだ時、自然の靜粛を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覺えるであらう。　武藏野の冬の夜更けて、星斗闌干たる時、星をも吹落しさうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分は屢、日記に書いた。　風の音は人の思を遠くに誘ふ。　自分はこの物凄い風の音の、忽ち近く忽ち遠きを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつゞけたこともある。　熊谷直好の歌に、

よもすがら木の葉かたよる音聞けばしのびに
風のかよふなりけり

といふのがあるが、自分は山家の生活を知つてゐながら、この



武藏野

歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。

林に坐つてゐて日の光の最も美しさを感ずるのは、春の末より夏の初であるが、それは今こゝには書くべきでない。　その次は黄葉の季節である。　半ば黄色く半ば綠な林の中を歩いてゐると、澄渡つた大空が梢々の隙間から覗かれて、日の光は風に動

日光　日光山　栃木縣の西北部に連なる
碓氷　碓氷峠　群馬・長野兩縣の境に在る

く葉末々々に碎け、その美しさはいひつくされぬ。日光とか碓氷とか天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が隈なく染まつて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つといふも、特異の美觀ではあるまいか。もし高きに登つて一目にこの大觀を占めることが出來るなら、この上もないこと。よしそれが出來難いにせよ、平原の景の單調なるだけに、人をしてその一部を見て、全部の廣い、殆ど限ない光景を想像させるものである。その想像に動かされつゝ、夕照にむかつて、黃葉の中を歩けるだけ歩くことがどんなに面白からう。林が盡きると野に出る。

武藏野には決して禿山はない。しかし大洋のうねりの樣に高低起伏してゐる。それも外見には一面の平原のやうで、

寧ろ高臺の處々が低く窪んで小さな淺い谷をなしてゐるといつた方が適當であらう。此の谷の底は大概水田である。畑は主に高臺にある。高臺は林と畑とで樣々の區劃をなしてゐる。畑は卽ち野である。されば林とても數里にわたるものなく、否恐らく一里にわたるものもあるまい。畑とても一畦數里に續くものはなく、一座の林の周圍は畑、一頃の畑の一方は林といふやうな具合で、農家が其の間に散在して更にこれを分割してゐる。卽ち野やら林やらたゞ亂雜に入組んでゐて、忽ち林に入るかと思へば、忽ち野に出るといふ樣な風である。それが又實に武藏野に一種の特色を與へてゐて、ここに自然あり、こゝに生活あり、北海道のやうな自然そのまゝの大原野・大森林とは異なつてゐて、其の趣も特異である。

稻の熟する頃となると、谷々の水田が黃ばんで來る。稻が刈取られて林の影が倒さに田面に映る頃となると、大根畑の盛で、大根がそろ〳〵拔かれて、彼方此處の水溜り又は小さな流の畔で洗はれるやうになると、野は麥の新芽で青々となつて來る。或は麥畑の一端が野原のまゝで殘り、尾花・野菊が風に吹かれてゐる。萱原の一端が次第に高まつて、其のはてが天際を限つてゐて、そこへ爪先上りに登つて見ると、林の絕間を國境に連なる秩父の諸嶺が黑く横たはつてゐて、恰も地平線上を走つては又地平線下に沒してゐるやうにも見える。

さてこれより又畑の方へ下るべきか。或は畑の彼方の萱原に身を横たへ、强く吹く北風を積重ねた枯草で避けながら、南の空をめぐる日の微溫い光に顏をさらして、畑の横の林が

風にざわつき、煌き、輝くのを眺むべきか。或は又直ちにかの林へとゆく路をすゝむべきか。自分は斯くためらつたことが屢〻ある。自分は困つたか、否決して困らない。自分は武藏野を縱横に通じてゐる路は、どれを選んで行つても自分を失望させないことを久しく經驗して知つてゐるから。

武藏野に散步する人は、路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞ其の縱横に通ずる數千條の路を當もなく步くことに由つて、始めて獲られる。春夏秋冬、朝晝夕夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも唯此の路をぶら〳〵步いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨處に吾等を滿足させるものがある。これが實に武藏

那須野
栃木縣北部の廣原

野第一の特色だらうと、自分はしみ〴〵感じてゐる。武藏野を除いて、日本に此のやうな處が何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。其の外何處にあるか。林と野とが斯くもよく入亂れて、生活と自然とが斯のやうに密接してゐる處が何處にあるか。武藏野に斯かる特殊の路のあるのは、實に此の故である。されば君若し一の小徑を行き、忽ち二條に分れる處に出たら、困るに及ばない。君の杖を立てて、其の倒れた方に行き給へ。或は其の路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到つて又二つに分れたら、其の小なる路を選んでみ給へ。或は其の路が君を妙な處に導く。其處は林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、其の前に少し許りの空地があつて、其の横の方に女郎花などの咲いてゐることもあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたら、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んでみ給へ。忽ち林が盡きて、君の前に見わたしの廣い野が開ける。足元から少しだら〴〵下りになり、萱が一面に生えて、尾花の末が日に光つてゐる。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、其の林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つてゐて、雲の色にまがひさうな連山が其の間に少しづつ見える。小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい風がそよそよと吹く。若し萱原の方へ下りてゆくと、今まで見えた廣い景色が悉く隱れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が萱原と林との間に隱れてゐたのを發見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮か

に映してゐる。水の潯（ほとり）には枯蘆が少しばかり生えてゐる。此の池の潯の徑を暫く行くと、又二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂。君は必ず坂を登るだらう。兎角武藏野を散歩するときに、高い處〳〵と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望をと求めるからで、而も其の望は容易に達せられない。見下すやうな眺望は、決して出て來ない。それは初から諦めたがいゝ。

若し君、何かの必要で路を尋ねたく思つたら、畑の眞中にゐる農夫にきゝ給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲をあげて尋ねてみ給へ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲できゝ給へ。若し若者であつたなら、帽をとつて慇懃に問ひ給へ。鷹揚に

教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。

教へられた路をゆくと、路が又二つに分れる。教へてくれた方の路はあまりに小さくて少し變だと思つても、其の通りに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいかぬ。其の時農家で尋ねてみ給へ。「門を出るとすぐ往來ですよ」とすげなく答へるだらう。農家の門を外に出てみると、果して見覺えのある往來。なる程これが近路だなと、君は思はず微笑をもらし、其の時始めて教へてくれた路の有難さがわかるだらう。

眞直な路で、兩側共十分に黃葉した林が四五町も續く處に出ることがある。此の路を獨り靜かに歩むことは、どんなに

樂しからう。右側の林の頂は、夕陽が鮮かに輝いてゐる。をりをり落葉の音が聞える許り、四邊はしんとして如何にも淋しい。前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落ちつくした頃ならば、路は落葉に埋もれて、一足毎にがさ〳〵と音がする。林は奥まで見すかされ、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。尙更人に遇はない。愈、淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、時に一羽の山鳩のあわたゞしく飛去る羽音に驚かされる。

同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが、今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角をきめて、別な路を當もなく歩くが妙である。さうすると、思はず落日の美觀を見ることが

山は暮れの句
谷口蕪村

ある。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士の中腹に群る雲は黃金色に染まつて、見るがうちに樣々の形に變ずる。連山の頂は、白銀の鎖の樣な雪が次第に遠く北に走つて、終は暗澹たる雲のうちに沒してしまふ。

日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れようとする。寒さが身にしむ。其の時は路を急ぎ給へ。ふと顧みて、思はず、新月が枯林の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然又野に出る。君は其の時、

山は暮れ野は黃昏の薄かな

の名句を思ひ出すだらう。

（獨歩全集）

九　吾が家の富

徳富蘆花
名は健次郎
小説家
熊本縣の人
昭和二年歿
年六十

家は十坪に過ぎず、庭はたゞ三坪。誰かいふ、狹くして且陋なりと。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狹きも碧空仰ぐべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日はこゝにも照れば、四季も來り見舞ひ、風雨雪霰かはるがはる到りて、興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開きて樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。隣家に花樹多し。

風に隨ひて飛花吾が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るが中に滿庭花の衣を著く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山梔（くちなし）あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の吾が家に開くは宜なりけり。老李の背後に一株の碧梧あり。その碧幹亭々として些かの邪なく、吾がごとく直かれと教ふるに似たり。梧葉と、手水鉢の側なる八角（やつ）金盤（で）とは、葉廣うして吾が家の雨聲を多からしむ。李熟して、白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つく〳〵ぼふしの聲に世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃出で、たゞ一株前の家主の植殘し

たる黄菊も咲出づ。名苑の花美しといふとも、秋のあはれ、閑寂の趣は、却つて吾が庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁なりせば、「獨憐細菊近荊扉」とや吟ぜん。恥づらくは、「海内文章落布衣」と唱すべき身にあらざるを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして、滿樹黄金よりも黄なり。木枯の風起れば、かぐや姫の扇にせまほしき其の葉翩々として飜り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人はいふなる錦を吾は庭に敷きぬ。

木の葉落盡くしては流石に寂しげなるも、日影月影愈〻多くなりて、空を見、星を見るに障なきは嬉し。（自然と人生）

蛻巖　梁田蛻巖　名は邦美　播磨國（兵庫縣）明石藩の儒者　寶暦七年（一七五七）歿、年八十六

獨憐細菊近荊扉　琪樹連レ雲秋色飛。獨憐細菊近荊扉。登レ高能賦今誰是。海内文章落布衣。

かぐや姫　竹取物語の主人公

一〇　乃木將軍

森鷗外

つはものの武勇なきにはあらねども、
眞鐵なすベトンに投ぐる人の肉、
往くものは生きて還らぬ強襲の
鋒をしばし轉じて、右手のかた、
圖上なる標のたかさ二零三、
いたゞきのふたつ聳ゆる石やまに、
たえ〴〵の望のいとを掛けてこそ、
きのふけふ、軍の主力を向けてしか。

森鷗外　名は林太郎　醫學博士　文學博士　陸軍軍醫總監　帝室博物館長　宮内省圖書頭　島根縣の人　大正十一年歿　年六十一

ベトン　コンクリートの一種

二零三　關東州旅順市西北の高地　二零三高地又爾靈山とも呼ぶ

霜月
明治三十八年

高崎山
關東州碾盤溝西南約一・二粁の高地
高崎第十五聯隊が占領した山

柳樹房
關東州水師營の東約一萬米の地
旅順攻圍軍總司令部の所在地

曲家屯
碾盤溝の北方一粁の地

霜月の三十日の夕まぐれ、
將軍は高崎山の師團より、
たゞ一騎、柳樹房なる本營に
歸らんと、曲家屯をぞ過ぎたまふ。
ほの暗き道のほとりを見たまへば、
身うち皆血に塗れたる卒ありて、
そびらには、はやこときれし將校の
亡骸をかきのせてこそ立てりけれ。
「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひて行く。」
「聞し召せ。脊負ひまつるは、奴わが

南山
關東州金州半島にある
明治三十七年五月二十七日之を占領

主と頼む乃木將軍の愛子なり。
年老いし將軍の家の二人子、
そのひとり勝典ぬしは、いちはやく
南山に討たれ給ひて、殘れるは
おとうとの保典のぬしひとりのみ。
脊負へるはその一人子の亡骸ぞ。

父君は心をゝしく、我が主をも
隊附のまゝにあらせて、『討死の
身の果てはおのれと三人、葬をば
ひと時に營め』と宣り給ひしを、

友安旅團
陸軍少將友安治延の率ゐる後備歩兵第一旅團で、二零三高地占領に最も奮戰した

人々の強ひて計らひつるにより、
さいつ頃友安旅團の副官に
職かはり、まだ程經ぬに、この朝け
あへなくも空しき骸となりましぬ。

果てましし處は高地二零三。
眼鏡もて敵の備を望みます
うら若き額(ぬか)のたゞ中打貫かれ、
ひと言をのたまはんひまもなく、
持口の南の峰にうせ給ふ。
その骸を奴脊負ひて、此の村に

ありと聞く野戰病院たづぬれど、
くるほしき心からにや、たづねえず」。

かくいふを駒をとゞめて聞きましし
將軍は、病院の旗あるかたを、
鞭あげて「彼方にこそ」とさし給ふ。
面ざしはかはたれ時に見えねども、
目ざとくも雲の絶え間ゆ覗ひし、
さむ空にまだ輝かぬ冬の星、
更(から)闌けて、友なる星に「將軍の
睫毛だに動かざりき」と語りけり。

（歌日記）

冬ごもり

二 冬ごもり

相馬御風
名は昌治
文學者　歌人
新潟縣の人
明治十六年生

相馬御風

冬籠りの季節となつた。毎年同じやうに、人々は冬の來やうの早いことを嘆ずる。しかも雪國に住む者に取つて、冬は一番懐かしい季節である。家といふものの本當の味はひを、彼等はたゞ此の冬の期間に於てのみ味はふことが出來る。長い〳〵冬――併し彼等の多くは決して退屈を感ずるやうなことはない。慰勞と休息と、そして彼等が追々退屈を感じ始める頃には、年々に新な春を待つ樂しみが彼等の心を浮立たせる。

農村でも漁村でも、毎年北國獨特の暴風雨の日が續き始める十一月の下旬から十二月の初旬には、殆ど毎戸に日を更へ

て法事が營まれる。そして、互に親戚や近隣のものを招き合つて、出來るだけ盛な酒宴を張る。料理は、無論どの家も殆ど同樣な有合はせの材料を使つた精進料理に過ぎないが、それでも彼等の間には、此の法事の馳走に人を呼んだり人に呼ばれたりすることが、一年中の最も大きな歡樂の一つとされてゐる。彼等はこれによつて祖先の靈を供養すると同時に、一年の間の彼等自らの勞苦を慰め、兼ねて大勢の人達との親睦を新にする機會とする。しかも是は、單に形式的とばかり云へないところの宗教的淨化の下に行はれるのである。

私も田舍に住むやうになつてから、よくかうした冬の法事の席に招かれるが、其の度毎に私は、坊さんを正賓として、老人も、大人も、女も、子供も、互に打解け合つた此の種の「呼合ひ事」の、

如何に味はひ深いものであるかを嬉しく貴く感じないでは居られぬのである。客の大部分は近隣のものであるが、中には、二里も三里も離れた村から、時にはひどい吹雪を冒してまでも呼ばれて來る者もある。そしてさういふ遠來の客が、宴果てて後、日の暮れたのも構はずに、提灯をつけ、馳走の殘りを入れた藁の苞をぶらさげなどして、再び吹雪の中を酒に醉つた勢で歸つて行くのなどを見ると、何とも云へない懷かしさを感ずるものである。彼等の歸つて行く家には、薄暗い茶の間の大きな爐の中で、ぱち〳〵音を立てながら柴や割木が燃えてゐるであらう。そして其の爐のまはりには、老人達や子供等が顏を眞赤にしてあたりながら、燒豆腐や、蒟蒻や、山芋や、干瓢などの煮しめを土產に持つて歸る主人を、ねむたさをこ

らへて待つてゐるであらう。冬籠りの味はひは、快い暖さの味はひである。肉體的にも亦精神的にも暖さの有難みを感ずることなしには、眞の冬籠りの生活の味はひを味はふことは出來ない。其處には歡びがあると同時に感謝があり、感謝があると同時に化導がある。家と云ふものの本當の有難さの如きも、雪國の冬籠りの生活を營んだ者でなくては充分に解らないだらうとさへ思はれもする。

冬籠りの本當の味はひが味はゝれるためには、どうしても雪がなくてはならない。雪は外界の騷がしさを消す。雪が深ければ深いほど、外の靜かさが深くなる。風の音も、水の音も、車馬の音も、そして人の足音も、全く消え果てたときに、はじめて家の內部が最も明かるく最も暖くなつて來るのである。

一茶
小林一茶
通稱彌太郎
俳人
信濃國（長野縣）の人
文政十年（一八二七）歿
年六十五

ほちや〳〵と雪にくるまる在所かな

一茶の此の句ぐらゐ、深く積つた雪の中に冬籠りしてゐる村々の暖い感じを捉へ得た言葉を、私は聽いた事がない。

これがまあつひの住家か雪五尺

から驚き、且嘆じた一茶にも、親しんでみればさすがに「ほちやほちや」といふ感じがしないでもなかつたらしい。

宵々の雪に明かるき住家かな

も面白い。更に、

雪の風呂南無阿彌陀佛としづみけり

に至つては、身親しく其の境にある者に取つて、全く驚嘆に値する秀句である。大雪の中に閉込められて、永い冬を過す雪國の人々に取つて、全く風呂の湯に飛込む刹那の氣持は、念佛

氣のない者でさへ、思はず「南無阿彌陀佛」を口にしないでは居られぬ程の、有難い救はれの氣持である。

冬は又――わけて越後の此の地方の人々に取つては――靜かな伸びやかな念佛の時である。他の地方の事は知らないが、私達の地方の到るところの村々では、寺へ集つて坊さんの說教を聽くことを、殆ど毎日の樂しみの一つとしてゐる。彼等はそれによつて、一つは彼等の娛樂慾を滿たすと同時に、やはり何より大事の心の養を得る唯一の方法だと信じてゐる。さういふ機會のあるごとに、彼等はまた互に彼等の信仰上の意見を――幼稚ではあるが、眞面目に――闘はすのである。

（相馬御風隨筆全集）

三　新年歌御會始

金子元臣

口繪參照

金子元臣
御歌所寄人
國學院大學教授
東京市の人
明治元年生

ことし昭和十二年一月廿六日午前十時、例に依つて我等寄人は宮中鳳凰の御間の西廂に候ふ。蓋し歌御會始の御儀に奉仕せんが爲なり。

先づ皇族方、御席に著かせられ、今日の諸役の人々は固より、宮内官、陪聽者も各、その席に著いて齊しく陛下の出御を待ち奉る。只見る、朝日の影は花やかに玻璃の大戸を透して、斜に御板敷に流れ、砌に近き老梅は無數の白を點じて、漸くその芳を吐かんとす。

ほのかに御廊下に當りて物の音の近づくが聞ゆ。畏くも玉歩を移させ給ふよと思ふ間もなく、諸員起立最敬禮のうちに、早くも正面なる御机を前にして御椅子に凭らせ給へり。

滿場寂として聲なし。御儀は始りぬ。讀師以下の人々は進んで中央なる設の席に著く。披講は下萬を先とする例なれば、まづ預選歌より講じ始む。讀師のさし出す懷紙を前に、講師まづ端詞を「年の始に田家雪といふことを仰せ言によりて詠める歌」と讀みあぐるや、森嚴の氣殿内に漲りて、聽く人、膚も粟立ちぬべし。歌の末を讀終れば、發聲引取りて、初句をいと永やかに諷誦し、二句以下は講頌の人々と共に合唱す。その聲調、悠揚和諧、恰も閑雲の山の岫より湧出づるが如く、又、澗水の巖に咽んで流るゝに似たり。我等は職責上、ひたすらその一字一句も聞洩らさじと耳傾くるに、冬ながらそゞろに腋下の汗ばむを覺ゆ。

抑、預選歌の事たる、庶民の詠進中より秀逸を拔萃して御前

披講の光榮に預らしむる特典なり。　明治の御世、偏にこの道を重んぜらるゝ餘り、一は以て庶民の心の聲を具に察し給ひ、一は以てその樂しみを同じく頒たせ給はんの大御心より勅められし御事と承る。　誠に畏れ多くも亦有難き思召と申すべく、古今東西未だ曾てかゝる例ある事を聞かず。　只わが日本國民のみが誇り得るこの恩遇なる事を思へば、感涙愈〻止め難し。　わが皇室と國民との連鎖を一段と緊密ならしむるものは、或はこの三十一字詩詠進の上に存するには非ざるか。

かくて懷紙は次々に差換へられ、披講はそも幾返りにかなりぬらん、讀師軈て鷺歩して御机の前に進み、御懷紙を賜はりて席に返れば、講師一きは恭しく「年の始に田家雪といふことを詠ませ給へる大御歌」と、高らかに講じ出すに、滿殿の諸員齊しく起立して謹聽し奉る。　御製は、高く低く、甲に乙に、諷誦し奉ること五回に及びぬ。　想ふに感吟の意を表し奉るならん。

あゝ雍々の音、朗々の響、そこに醞醸せられたる和靄の氣は、まことに雲の上ならずしては、いかでか窺ひ得べき。　太平の象はまさにこの御儀のうちにありとぞ申すべき。　我等微臣、辱くも纔かにその職に備るが故に、分寸の補なくしてかく天顏に咫尺する光榮を荷ふ。　顧みて心中大いに忸怩たるものなくんばあらず。

御披講はて、讀師再び進みて御懷紙を返し奉れば、卽ち御椅子を離れさせ給ふ。　諸員御靴音を送り奉りてのち退下す。

時に日の影は既に殿前にめぐりて、梅花の光いよ〳〵白く、遠く木立の繁みを洩れて鷄聲の午時を報ずるを聞く。

一三　勅題和歌「田家雪」

御製

みゆきふる畑のむぎふにおり立ちていそしむ民をおもひこそやれ

皇后宮御歌

この秋もみのりよからむをやまだのさとましろにぞゆきのふりける

皇太后宮御歌

里人のいさみきほひて新米を納めしくらにゆきぞつもれる

選歌　伊藤文治

大雪にそりひく人も立ちよりてわら火をかこむ小田のひとつ家

佐中精一

鳴子引き逐ひしすゞめのねぐらさへ思ひやらるゝ夜はの雪かな

小津たみ

ぬま水のひかりもさむき葛飾の田づらのさとにゆきはふりつゝ

島明

冬やすみ里にかへりてしづかにもひろき田の面の雪をみるかな

葛飾　南北東の三葛飾郡があつて東京市及び埼玉・千葉兩縣に亙つてゐる

伊吹
伊吹山
滋賀縣と岐阜縣との境にある
尾はり田
愛知平野の稻田

海田五百都

さえくれし伊吹おろしに尾はり田のたゐの家
むら雪ぞつもれる

角田とも子

うぶすなの神にまうづるみちのみは雪にあと
あり小山田のさと

上田三郎

松明をとりておりたつ鋤きそめのうしのせし
ろくたまる雪かな

佐々政一
號は醒雪
國文學者
文學博士
京都市の人
大正六年歿
年四十六

一四　日本趣味

佐々政一

日本人が淡い趣味を愛するのはその天賦であらう。淡いとは刺戟の少い單純なものの義で、例へば西洋料理とか支那料理とかの脂濃いものは、由來日本人の嗜好には遠い。噎せかへるやうな香水の薫よりは、仄かな薫香の覺束ないのを好む。芳烈な薔薇の香は賤しまれて、有るか無きかの梅が香は稱へられる。隨つて之を器物に見ても、西洋風の煖爐といへば、必ず凸凹や六角の煩はしい飾があるが、日本風の桐火桶は極めて單純な丸形で、胴のあたりが少し張出してゐるといふに過ぎぬ。食物を口に運ぶ道具にしても、日本のものは眞直な二本の箸であるが、之をナイフやフォークや匙などの複雜

な道具に一々込入つた彫刻などのあるものに比すれば、實に同日の論ではない。其の茶匙にしても、日本の茶席に用ひるものは、竹の篦の一端を曲げてざつと削つただけのもので、よしや贅澤な象牙製のものであつても、これに彫刻などを施すことは、日本趣味の許さぬところである。

かゝる傾向は、武家時代の質朴な文化により、或は禪宗の端的な教義によつて、益〻培養され來つたものであることは敢へて疑ふべきではないが、その素因は既に平安朝に存してゐる。かの源氏物語に、攝政太政大臣家と二條大臣家とを比較して、前者のたゞ何となくよしありげに奥ゆかしい有樣と、後者の今樣風にきらびやかな物のみをいやが上に列べた有樣とを敍して、一も二もなく二條家を無趣味だとして斥けてゐるこ

攝政太政大臣家・二條大臣家　源氏物語中の權力ある朝臣の家の名

とや、或は枕草子に梨の花をほめて、よく〳〵見れば、その花瓣の一隅に、覺束ない幽かな色がついてゐるのが面白いと云つてあることなどを思ひ比べても、或は歌人等が霜に惱んだ菊の花を面白く移ろうたと稱へて、その紅紫爛漫たる眞盛を却つて等閑にしてゐることなどを見ても、所謂「こちたく、けざやかなる」ものは、その好む所でなかつたことが極めて明らかである。

佐々政一

徒然草は稍後のものであるが、その著者は實に平安朝趣味の渇仰者で、田舍者によつて始められようとした新しい趣味

枕草子　平安朝中期に成つた隨筆　作者清少納言

徒然草　二卷　吉野朝時代に成つた隨筆　作者吉田兼好

に對して、極力反抗した人である。其の古風な物が、物毎に「やすく、すなほ」であつたのを慕つて、今樣の複雜な絢爛な物を物毎に排斥してゐるのは、最も著名なことである。かの內裏の殿上の櫛形の窓が、昔は木の緣もとらず、唯圓く穴を穿つたのみであつたのに、新造營の時に、その窓に誤つて緣をとつたのみならず、その形が少し複雜なものになつてゐたので、故實家が之を見附けて改造させたといふことを、さも重大な手柄のやうに記してゐるのを見ても、如何に單純なものを愛したかといふことが容易く想像されよう。

武陵桃源　支那の傳說にある仙鄉

古の人は烈しい刺戟を忌んで、幽かな淡い趣味を樂しんだ。かの武陵桃源にも比ぶべき平安朝ののどけき都をすら、動もすればなほ刺戟に堪へずとして、太古のまゝの深山に隱れた者もある。都鄙漸く戰亂の塵に汚されゝば、乃ち四疊半の茶室に立て籠つて、此處に塵外の閑寂を味はゝうとした。茶器も膳部も目をひく色香を避けて、床の間には淡彩の小幅を掛ける。若し一輪の花を活けようとすれば、その小幅をさへ取去つて、花のみの床にしたといふのは、實に周到な用意である。

三十一文字の和歌、十七字の發句は、この一輪の花である。その五音七音の外に、何等の珍奇な複雜な形式をも求めないのは、單純な桐火桶に似てゐる。更にその趣味の淡々として人の耳目を聳動するもののないのは、かの薔薇の香を卑しむ心から來たものである。思ふに、一輪の菊よりも菊人形の花花しきを好み、桐火桶よりも飾附のある煖爐を好むのは、特別な修養のない人の狀態である。殊に薔薇の香水は如何なる

人の鼻にも感ぜられるが、薫香の幽かなるは香道に入るに非ざれば知難いのである。

是に於てか、日本の所謂高尚な趣味は、之を西洋趣味に比すれば、甚だしく普遍性を缺いて、特別な修養のある人の間にのみ味はゝれるといふ傾向を生じた。例へば、今日普通の教育を受けた青年に、始めて脂濃い西洋料理を味はゝせてみると、最初はその淡泊ならぬを厭ふかも知れぬが、之に慣れることは頗る早いにも拘らず、會席料理の妙味を解せしめることは容易の業でない。況や菊人形の美しいことは生まれながらにして知つてゐるが、一輪の投込に趣味を感ぜしめるには多大の修養を經なければならぬ。

一體日本人には淡泊なものを好む傾向はあつた。併しこの傾向を基として漸次涵養せられて來た極めて淡い極めて幽かな趣味といふものは、他の濃厚なものよりも一層味はひ難い程度にまで進んでゐるのである。我が國の文藝が多く普遍性を失つて、俳諧は俳人のみに、和歌は歌人のみに歡ばれ來つたのは、こゝに主因がある。

淡きを好む傾向は、更に他面に於て、わが文藝、殊に詩歌の類をして實生活と甚だしく隔絶せしめる原因をなした。抑實生活上のことは、常に人間の利害の念を喚起するものであつて、その利害の念はやがて人生に對する烈しい刺戟である。淡々たる趣味の鑑賞にのみ專らなる精神が、かゝる題目を避けようとすることは當然の傾向であらう。されば、いにしへ萬葉時代にあつては、貧民が租稅の誅求に惱む有樣も歌はれ、

チャンバレーン
イギリスの言語學者
(1850—1935)

社會生活の道德的制裁も敎へられた。然るに、平安時代に入つては、此等のものは總べて歌道の好題目でないとして排斥せられて、唯偏に風流な雪月花に憧れるものとなつたのである。チャンバレーンは、日本人の所謂詩的といふ語が餘りに偏狹であるのを疑つて、世界の何れの國にも見ない所であるといつてゐるが、げに我が國の詩歌の題材が極めて狹いといふことは否むべからざることで、この傾向が歩一歩甚だしくなると共に、益〻實生活に遠ざかつて、普通の人間卽ち特別な修養のない人には、殆ど沒交渉のものたらんとするに至つたのである。これ亦普遍性を失つた一原因であらう。

顧みれば、我が國の文藝が淡い趣味の上に立つてゐることは、上來說來つた諸原因がその根柢を成してゐる。一の淡い趣味といふことは、種々の方面から、わが實生活とわが文藝とを隔絕せしめて、終にその普遍性を失はしめた。かくして新日本の青年は、恰も會席料理よりも西洋料理を好むやうに、一も二もなく西洋文藝のみを崇拜するに至つた。彼等は香水の香に醉つて、薰香の幽かな薰は感じ得ない有樣である。千年以來、我等の祖先の間に養はれ來つた、かの淡い、なつかしい、奧ゆかしい趣味は、今や將に亡びようとしてゐる。

思ふに、普遍性を失つた文藝は、健全な發達を遂げたものといふべきではなからう。併しながら、其處に宿る淡い趣味、幽かな匂は、我が國民性に獨特のものである。我等は果して默然としてその亡びゆくに任せてよいであらうか。

（醒雪遺稿）

一五　俳句に就いて

高濱虛子
名は清
俳人
松山市の人
明治七年生

高濱虛子

俳句は十七字の詩であるといふことは、解りきつたことのやうではあるが、私は茲に改めて「俳句は十七字の詩である。」といふ事を、第一にはつきり言つて置く。

和歌は千數百年の歴史をもつ短い詩である。この和歌から連歌が起り、連歌から俳諧となり、俳諧から俳句が生まれて來た。この變遷は、少くとも百年二百年の年月を經て成つたものであるが、畢竟、俳句は和歌の上の句が獨立して出來たものである。隨つて、和歌では五七五七七の調であるが、俳句は五七五の調である。

この和歌の五七五七七といふ調子は、或感じを縷々として

あまの原の歌
安倍仲麻呂

古池やの句
松尾芭蕉

述べるに適してゐる。たとへば、

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に
出でし月かも

といふ歌の如きは、たゞ月に對し、海原遠く離れた故山を偲ぶものであるが、かく三十一字になつて見ると、如何にもやる瀬ない情緒が、綿々として出てゐるやうな感じがする。これは五七五七七の調子が、自然に縷々としてその感じを述べるに適してゐるからである。ところが、俳句になると、

古池や蛙飛びこむ水の音

といふやうに、和歌では下の句として缺くことの出來ない七七の文字が省かれて、單に五七五といふ調子であるから、大いに面目を改めて、ぼく〳〵した調子になつて來る。上に述べ

たやうに、俳句も和歌の上の句だけを取つたものであるから、やはり和歌のやうな調子のものでありさうに思へるが、實際は大變違つて、全く別種のものとなつてゐる。この五七五といふ調子は、どんな調子のものであるかといふと、五七五の三つが一寸離れ〴〵になつてゐるやうな感じがある。和歌の方は、七七といふ文字がその後にあるがために、全體の調子が伸びやかになつて、渾然として一つに溶合つてゐるのであるが、その七七の文字が無くなつて、單に五七五だけになると、その五と七と五とが各、獨立して、別々のものとなつて行かうとする傾向がある。これが和歌と俳句との大變な相違となるのである。

即ち、この古池の句にしても、先づ「古池や」といふ五字で、讀者

に古池の景色を想像させ、次に「蛙飛びこむ水の音」といふ十二字で、蛙の飛込む水音がするぞと、第二段の想像をさせるといふ順序になつて來る。換言すれば、古池の句の場合は、初の五字だけが獨立してゐて、あとの七と五とは連なつてゐるのである。

芭蕉の句

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふやうな句になると、五と七と五と皆離れ〴〵になつてゐる。この句意は後に述べよう。

和歌は、「てにをは」の文學といつてもよい程に、「てにをは」をや

かましくいふが、これもやはり、綿々として盡きぬ情を歌ふに適した文學だからである。然るに、俳句では、「てにをは」は勿論、説明的な言葉は出來るだけ省略し、「や」とか「かな」とかいふ特別の助辭を使用する。隨つて、「てにをは」には重きを置かない。この俳句の調子から來る特色が、情を述べるのにはどうも不適當なのである。

この情を述べるに幾分でも不適當な文學である俳句の使命は、然らば何であるかと言へば、それは景色を描くといふ點にある。恰も繪畫の樣に、景色を言葉で、文字で描くのである。

元來、文學は言葉で出來てゐるもので、言葉は時間的のものであるから、感じを順々に歌つて行くとか、又は事件を順々に述べて行くとかいふのには適してゐる。長い小説の樣なものでも、短い和歌のやうなものでも、或事件の推移を寫すとか、或感じを述べるとかいふ性質のものである。それが畫であると、目に見る或瞬間の景色を畫面に描き現すものであつて、時間的でなくて、全く空間的のものである。然るに、俳句は意外にも、――私は、「意外にも」といふ――繪畫に近いものとして存在してゐる。

併しながら、景色を描くといつても、文學であるから繪畫とは全然同一にはならないが、大體に於て、文學本來の性質たる時間的變化を描くに適しないで、空間的描寫に適してゐると言へようと思ふ。これは五七五といふ調子と、切詰めた短い詩形とから起つた當然な結果で、これがやがて一方に大なる特色を形造つてゐるのである。尤も、かういへばとて、俳句も

文學である以上、勿論、感じとか事件とかを述べてはならぬと言ふのではなく、又古來さうした俳句は全く無いなどといふのでもない。

又、俳句には、「季題」といつて、春夏秋冬の季を述べなければならぬ事になつてゐるが、これは景色を描く上には當然の要求である。何故なれば、四季を超越した景色といふものは、全然この世界には存在しないからである。次に、實際の句に就いて説明を二三試みよう。これは極端な例であるが、

女郎花腰黒茶碗髯奴

女郎花の句　大村可全

といふのである。これはどんな意味かといふと、女郎花が咲いてゐる、その側で髯の生えた奴が腰黒茶碗で飯を食つてゐるといふのである。これは前にも述べたやうに、五七五の調子から自然に離れ〴〵になつてゐるのである。即ち、女郎花、腰黒茶碗、髯奴と、別々に離して述べてあるので、たゞ我々が心の中でその離れ〴〵になつてゐる物に連絡をつけて、女郎花が咲いてゐる傍で、髯奴が腰黒茶碗で飯を食つてゐる樣子を思ひ浮かべるのである。これは繪畫にすれば、女郎花と腰黒茶碗と髯奴との三つの別々な物が、一畫面に描き現されてゐる譯になる。同じやうな極端な例であるが、前に擧げた芭蕉の句、

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふのは、奈良は古の都であつて、「奈良七重」は、人家が澤山立並んで賑やかであつたといふことをいひ、「七堂伽藍」は、立派なお寺の大きなのがあり、そして、「八重櫻」は、奈良は八重櫻の名所

名月やの句
炭太祇

であるから、櫻の盛の奈良といふ事を現した句である。この句はどうかといふと、一寸取止のつかない樣な句らしく考へられるが、我々は勝手に想像して、一幅の古い奈良の畫を描き出すのである。これらの句は共に極端な例であるが、次に

名月や舟なき磯の岩傳ひ

といふ句に就いて考へて見よう。こゝに「名月や」といふのは、空に名月がかゞやき渡つてゐるといふので、「舟なき磯」は、舟が一艘も見えない磯といふのであり「岩傳ひ」は、その磯の岩の上を人が傳うて歩いて行くといふのである。これにも言葉が大變に省略されてゐる。私は前に和歌は「てにをは」の文學であると言つたが、俳句では「てにをは」のみならず、その他の色々な言葉も省略される。髯奴の句も、たゞ名詞をつゞけたばか

蕪村
谷口蕪村
名は長庚
俳人
攝津國（大阪府）の人
天明三年（一七八三）
年六十八

りであり、奈良の句も、名詞ばかりである。岩傳ひの句は何も別にいつてはゐないが、月の好い晩に岩傳ひに人が歩いて行き、舟は一艘もなくて淋しい、といふことが想像される。して見ると、この句に於ても、「てにをは」のみならず、如何にも多くの言葉が省略せられて、簡單になつてゐるのが解る。このやうに、景色を描くといふ點に於ては、繪畫と同じやうであるが、俳句の方には、岩傳ひに歩いて行くといふやうな時間的なことも吟じ得るが、畫の方にはそれが全く出來ない。

蕪村の句に、

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

といふのがある。これは、水鳥が浮いてゐると、舟の中で女が菜葉を洗つてゐる景である。京都の賀茂川などには、よく菜

を洗つてゐる女を見受けるが、場所は何處と限らない。舟で女が菜を洗つてゐる。菜を洗つてゐる女に特別に何の關係があるといふのでもなしに、水鳥が浮いてゐる、といふ景色で、全く繪畫と同じであり、卽ち、舟に菜を洗ふ女と水鳥とで、近景と遠景とを描いてゐるのである。

から云ふ風に、俳句は和歌の上の句から獨立した十七字から成つたものであるが、それが十七字になつて今日に到る迄に、十七字の詩として獨立する必要上、和歌の範圍を脫して別に景色を描くといふ一つの大きな特色を成したのである。然もこれは偶然に成つたのではなく、五七五といふ調子から來た當然の結果である。

一六 城跡

正岡子規

大砲や城跡荒れて梅の花

雲無心南山の下畠打つ

舟と岸と話してゐる日永かな

汐干潟隣の國へつゞきけり

絕えず人いこふ夏野の石一つ

夏嵐机上の白紙飛盡くす

汽車過ぎて煙うづまく若葉かな

筑波
筑波山
茨木縣筑波・眞壁・新治三郡の境にある

初嵐軍艦悠然として來る
蝙蝠や空に明かるき雲の峯
赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり
門を出て十歩に秋の海廣し
稻妻や一本杉の右左
禪寺の門を出づれば星月夜
湖青し雪の山々鳥かへる
薪を割る妹一人冬籠り

尊德先生
二宮尊德
幕末の經濟家（神奈川縣）相模國の人
安政三年（一八五六）歿年七十

富田高慶
陸奥國（青森縣）中村藩士
二宮尊德の高弟
明治二十三年歿年七十七

栢山村
相模國（神奈川縣）足柄上郡櫻井村の字

曾我別所村
相模國足柄下郡下曾我村の字

天明
光格天皇の御代の年號

一七　尊德先生の幼時

富田高慶

先生、姓は平、名は尊德、通稱は金次郎。その先は曾我氏に出づ。二宮は其の氏なり。同じく二宮と稱するもの、相模國栢山村に總べて八戸あり。皆其の氏族なりといふ。父は二宮利右衞門、母は曾我別所村川窪某の女なり。祖父銀右衞門常に節儉を守り、家業に力を盡くし、頗る富裕を致せり。父利右衞門の世に至り、邑人皆これを善人と稱す。民の求に應じ、或は施し、或は賑貸し、數年にして家產を減じ、積財悉く散じ、衰貧既に極まる。然りと雖も其の貧苦に安んじ、敢へて昔日施貸の報を思はず。此の時に當つて先生生まる。實に天明七年七月二十三日なり。次子を三郎左衞門、末を富次郎といふ。

寛政三年
二四五一年
光格天皇の御
代

酒匂川
富士山の東麓
に發源して相
模灣に注ぐ

一畝
約一アール
（百平方米）

父母貧困のうちに三男子を養育し、其の艱苦言語の盡くすべきにあらず。

時に寛政三年、先生五歳、酒匂川洪水し、大口の堤を破りて數箇村流亡す。此の時利右衛門の田圃一畝も殘らず、悉く石河原となる。素より赤貧、加ふるに此の水害に罹り、艱難彌〻迫り、三子を養ふに心力を勞する事幾千萬、先生終身言此の事に及べば、必ず涕泣して父母の大恩無量なることをいふ。聞く者皆之が爲に涕を流せり。

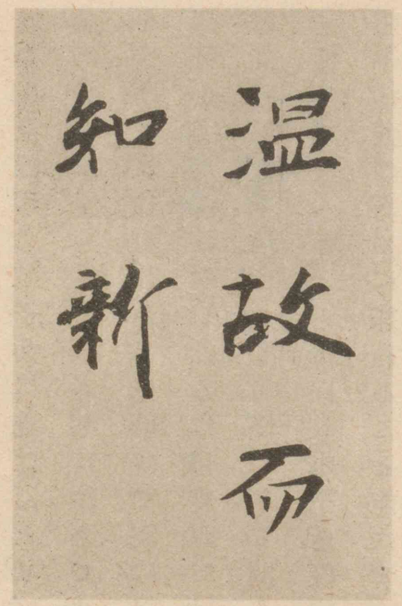
二宮翁の幼時

某年父病に罹り、極貧にして藥餌の料に當つべきものなし。已むを得ず田地を鬻ぎて金貳兩を得たり。利右衛門疾治して歎じて曰く、「貧富は時にして免れ難しと雖も、田地は祖先の田地なり。我治病の爲に之を減ずること、豈不孝の罪を免れんや。然りと雖も、醫藥其の價を謝せずんばあるべからず」と、大息して醫師に往き、貳兩を出して其の勞を謝す。醫師某眉を顰めて曰く、「子の家極めて貧なり、何を以てか此の價を得たる」と。利右衛門答へて曰く、「誠に余が赤貧なる、子の言の如し。されど家貧なるがために治療の恩を謝せずんば、何を以て世に立たんや。子之を問ふに、實を以て告げずんば、子の意も亦安からざるか。貧困極まれりと雖も、未だ些少の田地あり。これを鬻ぎて謝せり。子勞すること勿れ」と。醫師愁然とし

て涕を流して曰く、「余、子の謝を得ずと雖も飢渴に及ばず、子家田を失ひて一旦の義を立て、後日何を以て妻子を養はんや。余、子の病を治め、却つて其の艱苦を增すを見るに忍びんや。速かに其の金を以て田地を償ひ、余に報ずるを以て勞すること勿れ」と。利右衞門肯ぜず。醫師曰く、「子辭すること勿れ。貧富は車の如し。子今貧なりと雖も、安んぞ富時なきを知らんや。若し家富むの時に至り此の謝をなさば、余も快く之を受けん。何の子細あらんや」と。是に於て利右衞門大いに感じ、三拜して其の言に從ひ、强ひて其の半金を以て謝とし、其の半金を持ちて歸る。先生、父の病後の歩行を案じ、其の歸路の遲きを憂へ門に出でて之を待つ。利右衞門、醫師の義言を悅び、兩手を舞して歩行す。先生迎へて曰く、「何の故に悅び給ふ

事斯くの如くなるや」と。父曰く、「醫師の慈言斯くの如し。我汝等を養育することを得たり。是を以て悅に堪へず」と。

寛政十二年、先生年十四、父利右衞門大いに病みて日々に衰弱す。母子これを歎き、晝夜看病怠らず。家產を盡くして其の治を求め、鬼神に祈りて誠精を盡くせり。然れども命なるかな、終に同年九月二十六日歿す。母子の悲歎慟哭甚だしく、邑人皆これが爲に涕泣せり。



二宮尊德筆蹟

母三子を養育するに艱難彌〻極まれり。母、先生に言つて曰く、「汝と三郎左衞門とは、我如何樣にも養ひ遂げん。末子までは力に及ばず。三子共に養はんとせば、皆共に飢ゑんのみ」と。是に於て末子を携へ、緣者某に往きて慈愛を請ふ。某其の託を受けてこれを養ふ。母悅びて家に歸り、二子に告げて共に艱苦を凌がんとす。然るに母寢ねて徹夜寢ぬること能はず。毎夜流涕枕を沾す。先生怪しみて問うて曰く、「毎夜寐ね給はず、何の故なるか」と。母曰く、「末子を緣家に託せしより、我が乳張り、痛苦のために寐ぬること能はず。數日を經ば此の憂なからん。汝勞すること勿れ」と。言終らざるに涕潸々たり。先生其の慈愛の深きことを察し、泣いて曰く、「前には母君の命に從ひ末子を他に託せり。案ずるに、赤兒一人ありとも何程

大學
一卷
支那の經書
四書の一
著者曾參

の艱苦をか增さん。明日より某山に往き薪を伐り、之を鬻ぎて末子の養育をなさん。速かに彼を戻し給へ」と。母此の言を聞き大いに悅び、「汝しかいふは誠に幸なり。今より直ちに彼の家に至り戻し來らん」と、速かに起ちて往かんとす。先生之を止めて曰く、「夜、今、子に及べり。夜明けなば余往きて抱き來らん。夜半の往返は止まり給ふべし」と。母の曰く、「汝幼若、なほ末弟を養はんと言ふ。夜半の往返何を以て厭はんや」と、袖を拂つて隣村の緣家に至り、旨趣を告げて末子を抱き家に歸り、母子四人共に悅ぶこと限なし。是より雞鳴に起きて遠山に到り、柴を刈り薪を伐りて之を鬻ぎ、夜は繩を綯ひ草鞋を作り、寸陰を惜しみ、身を勞し心を盡くして母の心を安んじ、二弟を養ふことに苦勞せり。而して採薪の往返にも、大學の書

小田原　相模國（神奈川縣）足柄下郡小田原町

を懷にして、途中歩みながら之を誦して少しも怠らず。これ先生聖賢の學の初なり。途上高音に誦讀するが故に、人々怪しみ、狂兒を以て之を目するものあり。

小田原酒匂川は其の源富嶽の下より流出し、數十里を經、小田原に至りて海に達す。急流激波、洪水毎に砂石を流し、堤防を破り、動もすれば田畑を押流し、民家を毀つに至る。故に年年堤防修築の土功息まず。故に邑民毎戸一人づつを出して此の役に當らしむ。先生年十二より此の役に出でて以て勤む。然れども年幼にして力足らず、一人の役に當るに足らず。天を仰ぎ歎じて曰く、「我力足らずして一家の勤に當るに足らず。願はくは速かに成人ならしめ給へ。」と。又家に歸りて思へらく、「人我が孤にして貧なるを憐恕し、一人の役に當つといへども、我が心に於て何ぞ安んずることを得んや。徒に力の不足を憂ふるも詮なし。他の勞を以て之を補はずんばあるべからず。」と。是に於て夜半に至るまで草鞋を作り、翌未明、人に先立ちて其の場に至り、人々に言つて曰く、「余若年にして一人の役に足らず。他の力を借りてこれを勤む。其の恩を報ずるの道を求むれども得ず。寸志なりといへども草鞋を作りて持來れり。日々我が力の不足を補ふ人に報いん。」と言ふ。衆人其の志の常ならざるを賞し、これを愛し、其の草鞋を受けて其の力を助く。役夫休すれども休まず、終日孳々として勤む。此の故に幼年なりといへども、土石を運ぶこと却つて衆人の右に出づ。人皆これを感ず。

飯泉村觀世音　今の神奈川縣足柄下郡豐川町字飯泉にある勝福寺本尊十一面觀音

先生十四歳の時、隣村飯泉村觀世音に參拜し、堂下に坐して

念ずる事あり。忽然として行脚の僧來り、堂前に坐して讀經す。其の聲微妙、其の經深理廣大、一聞了然として意中歡喜に堪へず。誦經既に畢る。謹みて僧に問うて曰く、「今誦するところは何の經ぞ。」と。僧應へて曰く、「觀音經なり。」と。曰く、「余嘗て屢、これを聞けり。而して今聞く所に異なり。何ぞ余が心に徹することの明らかなるや。」と。答へて曰く、「世の誦する所は吳音なり。今國音を以て轉讀せり。これ子の解する所以か。」と。先生懷中を探り錢二百を奉じて曰く、「願はくは寸志を呈せん。今一たび誦讀し給へ。」と。僧其の志に感じ、轉讀以前の如し。讀畢つて去る。先生胸中豁然として大いに喜び、栢山村善榮寺に至り、和尚に謁して曰く、「大なる哉、觀音經の功德。其の理廣大無量、其の意云々。」と、說解流水の如し。和尚大いに

觀音經
妙法蓮華經觀世音菩薩普門品の略

善榮寺
曹洞宗の寺

驚きて、「余既に耳順を超えたり。多年、此の經を誦すること幾百千遍、未だ其の深理を解すること能はず。然るに子若年、一たび讀誦を聽いて無量の深理を明解す。嗚呼これ所謂菩薩の再來か。今野僧此の寺を退くべし。子願はくは僧となり、衆生の爲に此の寺に住し、大いに濟度の道を行ひ給へ。」と言ふ。先生固辭して、「これ余の望むところにあらず。余は祖先の家を起し、其の靈を安んぜんとす。志すところ出家にあらず。」と言ひて去る。これより後、彌、佛意も諸人を濟ひ安んずるより大なるものなきことを了知せりといふ。

（報德記）

二宮翁夜話
五巻
二宮尊徳の訓話を高弟福住正兄の筆録したもの

一八 天理人道

二宮翁夜話

翁曰く、天理と人道との差別を能く辨別する人少し。夫れ人身あれば欲あるは則ち天理なり。田畑に草の生ずるに同じ。堤は崩れ、堀は埋まり、橋は朽つ、是れ卽ち天理なり。されば、人道は私欲を制するを道とし、田畑の草を去るを道とし、堤は築き立て、堀はさらひ、橋は掛替ふるを以て道とす。此の如く、天理と人道とは格別のものなるが故に、天理は萬古變ぜず、人道は一日怠れば忽ちに廢す。されば人道は勤むるを以て尊しとし、自然に任するを尊ばず。

夫れ人道の勤むべきは、己に克つの教なり。己は私欲なり。私欲は田畑に譬ふれば草なり。克つとは此の田畑に生ずる草を取捨つるを云ふ。己に克つは我が心の田畑に生ずる草を削り捨て、取捨て、我が心の米・麥を繁茂さする勤なり。之を人道といふ。論語に「己に克ちて禮に復る」とあるは此の勤なり。

翁曰く、夫れ人道は譬へば水車の如し。其の形、半分は水流に順ひ、半分は水流に逆らうて輪廻す。まるに水中に入れば廻らずして流るべし。又水を離るれば廻ることあるべからず。佛家に所謂知識の如く、世を離れ、欲を捨てたるは、譬へば水車の水を離れたるが如し。又凡俗の、教義も聞かず、義務も知らず、私欲一偏に著するは、水車をまるに水中に沈めたるが如し。共に社會の用をなさず。

故に人道は中庸を尊む。水車の中庸は、宜しき程に水中に入りて、半分は水に順ひ、半分は流水に逆らひて、運轉滯らざるにあり。人の道も其の如く、天理に順ひて種を蒔き、天理に逆うて草を取り、欲に隨ひて家業を勵み、欲を制して義務を思ふべきなり。

翁曰く、天道は自然なり。人道は天道に隨ふといへども、又人爲なり。人道を盡くして天道に任すべし。人爲を忽にして天道を恨むること勿れ。

夫れ庭前の落葉は天道なり。無心にして日々夜々に積る。之を拂はざるは人道に非ず。拂へども又落つ。之に心を煩はし、之に心を勞し、一葉落つれば箒を取りて立つが如き、是れ

塵芥の爲に役せらるゝなり。愚と云ふべし。木の葉の落つるは天道なり。人道を以て毎朝一度は拂ふべし。又落つとも捨置きて、無心の落葉に役せらるゝこと勿れ。又人道を忽にして積り次第にすること勿れ。

愚人といへども、惡人といへども、能く教ふべし。教へて聞かざるも、之に心を勞すること勿れ。聞かずとて捨つることなく、幾度も教ふべし。教へて用ひざるも憤ること勿れ。聞かずとて捨つるは不仁なり。用ひずとて憤るは不智なり。不仁・不智は德者の恐るゝ所なり。仁・智二つ心掛けて我が德を全うすべし。

翁曰く、大事をなさんと欲せば、小さなる事を、怠らず勤むべ

千里の道
千里之行、始ニ於足下ニ。（老子）

し。小積りて大となればなり。凡そ小人の常、大なる事を欲して、小さなる事を怠り、出來難き事を憂ひて、出來易き事を勤めず。それ故、終に大なる事をなす能はず。これ小の積んで大となることを知らぬ故なり。たとへば百萬石の米といへども、粒の大なるにあらず。萬町の田を耕すも、その業は一鍬づつの功にあり。千里の道も、一歩づつ歩みて至る。山を作るも、一簣の土より成ることを明らかに辨へて、勵精小さなる事を勤めば、大なる事必ず成るべし。小さなる事を忽にする者には、大なる事は必ず出來ぬものなり。

翁いはく、山芋掘は山芋の蔓を見て、芋のよしあしを知り、鰻釣は泥土の様子を見て、鰻の居ると居らざるとを知り、良農は草の色を見て、土の肥瘠を知る、皆同じ。いはゆる「至誠神の如し」といふものにして、永年刻苦經驗して、發明せるものなり。技藝にこの事多し。侮るべからず。

翁曰く、家屋の事を、俗に家船（やふね）また家臺船（やたいぶね）といふ。おもしろき俗言なり。家をば實に船と心得べし。これを船とする時は、主人は船頭なり、一家の者は皆乘合なり、世の中は大海なり。然る時は、この家船に事あるも、また世の大海に事あるも、皆遁れざる事にして、船頭は勿論、この船に乘合ひたる者は、一心協力この家船を維持すべし。さて、この家船を維持するは、楫の取りやうと、船に穴のあかぬやうにするとの二つが專務なり。この二つによく氣をつくれば、家船の維持疑なし。然るに楫

の取りやうにも心を用ひず、家船の底に穴があきても、これを塞がんともせず、安閑として歳月を送り、終に家船をして沈没するに至らしむ。歎息の至ならずや。たとひ大穴ならずとも、少しにても穴があきたらば、速かに乗合一同力を盡くして穴を塞ぎ、朝夕ともに穴のあかざるやうによく〳〵心を用ふべし。これこの乗合の者の肝要の事なり。然るに既に大穴あきて、なほこれを塞がんともせず、おの〳〵己が心のまゝに安閑と暮しゐて、「誰か塞いでくれさうなものだ」と待ちゐて濟むべきや。助船をのみ頼みにしてゐて濟むべきや。船中の乗合一同、身命をも抛ちて働かずばあるべからざる時なるをや。

正富汪洋
名は由太郎
詩人
岡山縣の人
明治十四年生

一九 太陽の子

正富汪洋

わが國を表象するものは、
世界を遍く照らす
燦然たる太陽。

わが國民の理想は、
高照りわたる
唯一無比の太陽。

國の名は日本。
男子の稱は日子。

女子の稱は日女。
日の丸の國旗は、
そも〳〵世界に
何を意味する。

國民よ、皆
日の威嚴と、日の公明と、
日の德澤と、日の愛情とを保て。

日は利己的でない。
日本は利己的でない。
そこに天同化の偉力がある。

日は輝いて萬物を輝かす。
日本の國民は、輝いて
普く他を輝かす。

我等は他動的。
我等の使命は、
世界の幸福增進。

我は言ふ、我等の祖先の
常に抱いた大理想を、
揚げよ、行へよ、太陽の子よ、と。

新井白石
名は君美
德川幕府の儒官
江戸の人
享保十年（一七二五）
年六十九

上杉景勝
戰國時代の武將
豐臣家五大老の一人
元和九年（一六二三）
年六十九

白川
今の福島縣西白河郡に在つた白河關

白石
今の宮城縣苅田郡白石町

常陸國（茨城縣）
磐城・相馬
磐城藩（當主は磐城貞隆）と相馬藩（當主は相馬義胤）

二〇 弓矢の道

新井白石

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて、搦手より攻入るべき由の仰承つて、大阪を打立ち、夜を日に繼いで馳下る。白川より白石に至る間は、皆敵の中なれば道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城・相馬にさし掛つて國に歸らんとするに、相馬亦累代の敵國なり。恙なく通らんこと叶ふべからず。然るに政宗僅かに五十騎許り引具して、常陸國を經て、磐城と相馬との境に至り、先づ相馬が許に使者を立て、「此の度德川殿、上杉を征伐し給ふに因つて、政宗搦手より向かふべき由を承りぬ。路次既に寒がりて候ひし程に、東路に隨ひて漸く此の境に至り侍りぬ。餘りに道を早めて打ちし程

長門守義胤
相馬義胤
石田三成・上杉景勝と姻戚

窮鳥懷に入る
窮鳥入レバ懷ニ仁人所レ憫ム
（顏氏家訓）

に、士卒悉く勞れぬ。願はくは城下に旅館點じて賜はらん。馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず。」と言はせたり。長門守義胤之を聞いて、「あつぱれ、運の盡きぬる奴ばらかな。ただにも伊達は相馬が年頃の敵なり。ましてや身方討たれん一方の大將承るといふものを。いで〳〵今宵一夜討して、案内知らぬ者どもを、此處彼處に追詰めて、一人も殘さず討取つて、年頃の仇に報い、今度の賞に預らばや。」とて頓て民家をしつらひて迎へ入れ、家子・郎從等召集めて、夜討の樣をぞ議したりける。

爰に水谷三郎兵衞尉某、遙かの末座より進み出で、「末座の意見恐れ入つて候へども、既に僉議の座に列なつて候上は、心に存ずる所を申さざらんは其の詮なし。抑、『窮鳥懷に入る時は

駒が峰　福島縣相馬郡にある。

獵者もこれを殺さず』とこそ承れ。政宗ほどの大名が、既に年頃の怨を棄て、君を賴みて來りしを、たばかつて闇々と討たれんは勇者の本意とする所にあらず。長き弓矢の瑕瑾なり。又我が城を去つて彼の國の境駒が峰に到らんこと、行程僅かに三里。けふの日未だ未の時に下らず。政宗おのが境に到らんとだに思はば、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それに僅かの勢を以て此處に止ること、豈深き謀計あらざらんや。只同じくは、我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、先づ此の度は本國に返し給ひ、重ねて戰に臨まん時、尋常に軍して勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はん。と申しければ、滿座の輩、皆此の議に同じて、彼が旅館の邊に、粮料・魚鹽・秣・糠・藁に至るまで積置きて、夜に入り四面に篝火たかせ、兵共に夜を巡らせ、警衛心を盡くしてけり。

義胤が士共も、政宗が餘りに取鎭めたる體を見て、「憎し、いざ彼が振舞を試みん。」とて、夜更けて馬一二匹切つて放つ。雜人ばら走り散つて、以ての外に騷ぎ罵る。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛けて、左の手に刀提げて立出で、「相馬殿の御人や候。御人や候。」と言ひし時、「さむらふ。」とて參りければ、「物音高う候。何事にや。政宗が雜人ばら狼藉候はんには、よく鎭めてたべ。」とて、又内にぞ入りにける。斯くて夜明けぬれども、立ちもやらず、巳の刻ばかりになつて、義胤が許に使して一禮し、靜かに馬をうつて行く。竊かに人を附けて見せたるに、彼の國境の駒が峰のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く充滿ちて出迎へぬ。

上杉
上杉景勝
石田
石田三成
豐臣秀吉の臣
慶長五年(一六〇〇)歿
年四十一

藩翰譜
十三卷
一萬石以上の
諸侯の傳記沿
革の集錄

斯くて關が原の合戰事終り、天下悉く平ぎて、相馬既に世帶を沒收せられ、家ほろぶべきに決る。政宗、德川殿に訴へ申しけるは、「相馬は只にも政宗の年頃の敵なり。それに上杉・石田に與したるが、一定に候はんには、政宗彼が爲に討たるべき時至つて候ひしに、君の仰承り馳下る由を聞きて、忽ちに舊き恨を忘れ、新しき恩を施して候ひき。これ偏に彼が野心を挾まざりし故にあらずや。且は又累代弓矢の家、此の時に至つて長く斷絕すべきこと誠に不便の至なり。只然るべくは、彼が本領安堵の事、御免を蒙らばや。」と折に觸れて度々歎き奉りしかば、其の事となく、年月を經て後本領をぞ賜うたりける。

（藩翰譜）

嘉納治五郎
東京高等師範
學校長
貴族院議員
兵庫縣の人
昭和十三年歿
年七十九

二 死して惜しまるゝ人となれ

嘉納治五郎

生まれて而して長じ、長じて而して死す。禽獸かくの如く、草木かくの如く、人間亦かくの如し。されば人として禽獸草木と異ならんと欲せば、生まれがひある人となることを要す。予は更に前途有爲の諸子に向かつて、死して擧國の悼惜を受くる人たらんことを望む。

人生まれて呱々の聲を發するより、長じて一個の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩德一ならず。これを近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生まるゝや自營の道を知らず、自活の道を知らず、たゞ泣くこと

を知り、笑ふことを知るのみ。此の間晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が成長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。これに次ぐに師長の恩あり。我等が僅かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、われに誨ふるに事理を以てし、われに說くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我等をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは、豈我等が師長にあらずや。

嘉納治五郎

更に又至尊及び國家の恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる聖德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、その福祉を增進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我が父母師長をして我等に對する慈愛薰陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。然らずんば我等は亂離塗炭の苦に陷らん。我等の安全なる發育を遂げて一個の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後に於て、此等數者に酬ゆるは人間當然の義務にあらずや。

然れども人間の生涯は實に區々たり。或はその修養の時期に當りて、懶惰遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀徒に長じて、當に自營自活以てわが生育の恩に報ゆべき時に至るも、

無爲無能その父母の恩に報ゆること能はず、その師長の恩に酬ゆること能はざる者あり。況や國家が生を成す所以に酬ゆることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。

又その無能かくまで甚だしきに至らず、何等か一種の事に從ひ、國家に對して多少の裨益をなして自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、之を前の醉生夢死する者に比すれば、勝ること萬々なりと雖も、かくの如きは僅かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、その一生の經營事業の永く後世に德し、其の流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは我等の理想とすべき所にあらず。

我等は人間天賦の能力を善用し利用し、その畢生の事業は、以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを、長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實にこれに外ならず。

夫れ生きて一鄉の爲に功ある者は、死して一鄉の爲に惜しまれ、一郡の爲に盡くせる者は、一郡の爲に哀しまる。夫れ、その事業、よく國家全體の進歩を助成し、その忠誠、よく闔國民に認めらるゝ者に至りては、その事業の何たるを問はず、その人

の存否は國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。ここを以て其の人一度逝くや、國を擧げてこれを惜しまざるはなし。嗚呼天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而してその死の天下に知らるゝ者果して幾人かある。

少壯の諸子よ。諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も、一生の覺悟は卽ち今日より定め置かざるべからず。知らず、諸子は死して人に顧みられざる人とならんとするか、一鄕一郡の爲に惜しまるゝ人とならんとするか、抑、亦擧國の悼惜を受くる士とならんと欲するか。

前田夕暮
名は洋三
歌人
神奈川縣の人
明治十六年生

吉田
山梨縣にある
富士登山北口
十二封度
約五・五瓩

山中村
山梨縣南都留
郡中野村字山
中
甲府市から五
十粁

大棚
神奈川縣足柄
上郡

三　湖畔の少年

前田夕暮

荒涼たる富士山麓を、吉田から赤錆の磨滅した十二封度のレールの上を曳きずられた私の小さな汚れた電車は、ことりと音をたてて終點山中村でとまつた。

五六人の人と私は電車から降りた。三月初の午後三時頃の曇天に富士は深くも惠まれて、僅かに麓の森林帶の雪がところまだらに陰影と光とを作つて居る。そして、富士颪が颼颼と空から吹下してゐる山中村の往還を、五六人の人影が黑く吹飛ばされて、忽ちのうちにどこかへ姿を匿してしまつた。

私は、これから夜どほしでも湖畔を歩いて、酒勾川水源地帶の大棚山林まで行かねばならぬのであつた。然し、そこまで

平野山中と共に中野村の字

は少くも五里以上はあるのだ。それに道は不案内である。どうしても、案内者を賴む必要に迫られてゐた。で、とある百姓家の土間に私ははいつた。そして、それから平野といふ對岸の寒村まで馬を雇つた。圍爐裡ばたに、ほかり〳〵煙草をふかして、大縞のねんねこを著ぶくれてゐた赭ら顏の、いかにも荒村の野士を思はせる老爺は、なか〳〵に快諾してくれなかつたが、私はすた〳〵厩の方へ歩いて行つて馬棚から顏を出してゐる二頭のうちの黑毛の雌馬を選んで、否應なしにその背に鞍を置かせてしまつた。

「おゝい、金公や、この旦那を平野迄送つて來いよ。」

と納屋の方に向かつて、老爺は大きな聲で呼ばはつた。

金公は十四五歲の、みづのきの梢のやうに紅い顏をした少

年だつた。手も寒いためか紅く、そしてぴし〳〵とはねさうな元氣をその圓い光つた眼にあらはしてゐる。

「よし君賴むよ。」

と、私は積藁を足臺にして、馬の背に跨がつた。馬は知らぬ人間をのせた不安さに、おほきく胴ぶるひをした。

私達はかくして出かけた。

厩のうしろの防風林をつきぬけて行く。冷たい冬青（もちのき）の葉が私の顏にあたる。眼をあけて見ると、そこには灰色の平野が茫としてあらはれてゐた。——と思つたのは、それは凍つた山中湖の平面圖であつた。

斑々たる荒蕪地と、一面に素枯れた草原と、二三の村落の點在と、梢を磨ぎ光らせた濶葉樹林の一部とに取圍まれた富士

山麓の蝦の形をした山中湖は、たゞ一色の灰色に凍つてゐる。

私は馬上からはる〳〵と沖の方を見渡した。

灰色の湖面にひとところ、何か青くうね〳〵と盛りあがり盛りあがりしてゐる。私の視野がその一點に局限せられたとき、それは波のうねりであることがわかつた。富士颪に吹きさらされて、湖のまんなかに青波があがつてゐるのだ。

私は馬の背で、手を擧げて思はず、

「おゝい、沖に波があがつてゐる。」

と叫んだ。さきに手綱を曳いてゐた少年は振返つて、私の顏を見て笑つた。彼の笑顏は野菜のやうに新鮮で素朴であつた。

馬は、湖岸の雪を踏んで行つた。蹄の音が體に快く響いた。

少し行くと、岸に打込んだ杭に長い綱が結はへてある。その綱を辿つて湖の方を見ると、灰色の氷原の向かふの青い波の上に、船が一艘漂つてゐる。見てゐると、船は時折低く垂れ下した曇天に向かつて突きあげられる。かと思ふと、青波の向かふにふと姿をかくす。その都度、岸の杭の綱がちぎれるばかりに渚の雪を磨つて、張つたりゆるんだりする。

黑い水禽が一羽、鋭く啼いて私の頭の上をすぎる。

私は寒いので、頭からすつぽりと白い毛布をかぶつて、ゆらりゆらりと馬に搖られて行く。

一面に崩壞した土砂原の下を、私と、私の馬と、少年とは默つて行く。路傍の日かげには、雪が白く消殘つて、紅い灌木の梢が頭を出してゐる。

長池
山中湖の北岸

蒿雀がどこかで啼いてゐるなと思ひながら、私は寂しくなつて、少年に話しかける。少年は「へい」とか、「さうでない」とか、簡單な返辭ばかりしてゐる。

路の左側に、光つた濶葉樹林があらはれて來た。巨大な欅が白い幹を何本となく直立させてゐる。と思ふと、その下に青い野菜畑を見出して私は驚いた。村落があるのだと思つた。二三軒の戸をたてた家が、やがて木の間にその屋根をあらはしてゐた。

あたりは閑寂としてゐる。

地圖を出して見ると、點々と黑い點線は長池といふ部落であることを示してゐる。人の棲んでゐさうな氣配はしないが、野菜畑のあることを思へば、否定出來ない。

「こゝの村には人が冬でも棲んでゐるのか」

と少年に問ふと、たゞ「ゐる」と答は頗る簡單である。

その少年の簡單な返辭を裏書するやうに、向かふの木の間から一人の人が來た。蓬々と風に吹かせた灰色の頭髪が枯草のやうに光つてゐるのが、私の眼にはつきりと映つた。手に小鳥籠をさげてゐる一人の老爺であることが、野菜畑のそばに來たときに、私をしてなつかしさといふよりは一種の驚異に似た感動によつて、馬の歩みをとゞめさせた。老爺の姿は、あたりの荒涼とした風景にまことにふさはしくさへ思はれた。灰色の空雲と、地上の雪と、凍つた湖と、白く風に吹晒された冬木立と、ところ〴〵雪の下からあらはれた枯草と、これらもろ〳〵の風景のなかに點出された自然の一部としか、そ

れは思はれぬ程であつた。

併し、彼の老爺の後から一羽の家鴨が、寂しい低音で體の調子をとりながら歩いて來るのを見たとき、私は生けるものの歡を感じた。老爺は傍の木の枝にその小鳥籠を吊した。鳥籠には鳥がゐないやうであつた。と思ふと、薄い影のみがちらちらと動くやうでもあつた。

老爺は、木の枝に鳥籠――それはどう見なほしても、四五十間離れた距離からは鳥がゐるやうには見えぬ――をかけると、そのまゝ木の幹のやうな脊をみせて、枯木立のなかのまだらに雪をのせてゐる屋根の方へ遠ざかつて行つた。家鴨もまた寂しい影を雪におとして、老爺のあとに從つた。

私は、冬の姿をしみ〴〵と見たやうな氣持であつた。併し、

私の馬も少年も、たゞ道を急いでゐた。少年の持つてゐる手綱はたるんで雪をすつた。

私は馬の背の上で、しきりに寒さを感じた。まして、さつきの老爺の影のやうな姿を見てから一層寒くなつたやうだ。私は焚火を思つた。この雪原であか〳〵と燃える焚火を思つた。で、たうとう馬から私は降りて、少年と二人で湖岸の落葉林に入つて枯木をあさつた。枯れてゐると思つて折る山毛欅や犬しでの枝は、水のやうな香氣を散らした。私はその生木の香を嗅ぎながら、ふと忘れてゐたポケットの葉卷煙草のことを思ひ起した。

「さう〳〵、すつかり忘れてゐた」

と片手を外套のポケットのなかに挿入れて、その袋に指さき

を觸れてみた。

少年は林の奥に行つて、杉の枯葉や枯枝を一かゝへも拾ひ集めて來た。私達は早速に雪をかきよせて、それらの燃料を積みあげてマツチをすつた。濕つた杉葉は、唯烟るばかりでなか〳〵に火を點じなかつたが、それでもマツチを十本ほど無駄にする頃には、青い焰をあげはじめた。みる〳〵うちに風に煽られて、さつと赤く燃えあがつた。

私も少年も火に手をかざした。雪の中の焚火は、烟りながらも程もなく盛に燃えあがつて、私達のからだをあたゝめてくれた。少し離れてゐた馬までが、焚火の方へ少し恐る〳〵といふやうに寄つて來た。

私は煙草を端の端まで吸ひつくした。少年はふところから赤いふかし甘藷を取出して、火のなかに投込んだ。

「君は幾歳か。」

「十四。」

「學校は……。」

「今六年だ。」

「學校を卒業したら何になる。」

「百姓だ。」

と、彼は直ちに答へた。

「さうか、百姓になるか。」

と、私は何といふことなしにある感動を、少年のきつぱりした自信のある返辭から受取つた。

「俺はよい百姓になるぜ。俺は開墾をやるつもりだよ。」

「ほう、開墾を……？」

「湖畔を開墾して稲を作るつもりだ。學校を卒業する今月の末には雪が消えるから、すぐに村の人と始めるよ。」

と、彼は遙々と村の方を見渡して、青い稲田を想像してゐるやうな眸をした。この湖畔は殆ど火山灰の瘦地で、今まで米はとれなかつた。で、村の人々は玉蜀黍や甘藷を常食にしてゐるといふ。それを今度、この少年は新に湖畔を開墾して稲を作るのだといふ。私は少年の抱負と空想とに羨望に近い同情を抱かされて、また馬に跨がつた。

日が今にとつぷりと暮れかゝつて來さうなので、馬を少し急がせる。

私は馬上から、さらに幾度となく凍つた湖を展望した。そして、少年の空想がいつか實現される日のあることを思つた。

湖の沖には、いつまでも〳〵、たゞ、うね〳〵と音のない青黑い波が、垂れさがつた曇天の下でうねつてゐる。

路は固い寢雪の一本路である。その一本路は、時折、湖岸を少しはなれては山毛欅の木立のなかに入り、灌木原に出て、土橋を渡り、一うねりしてまた湖畔に出ては、溝の雪のなかに凍てついた沼芹の青さに示唆されて、更にその行手を私達の前にはる〳〵とあらはしてくる。

私達はとかくして三里の路を行暮れて、平野といふ村に著いた。

私は、村の馬の立場に行つて提灯を一つ借り、案内人を更に一人頼んだ。そして、はる〳〵と又三里の路を山中村に歸る

少年と、村はづれで別れた。別れる時も、私の提灯の灯を、少年の提灯にうつして、銀貨を幾枚か餘分に少年の紅い冷たい掌の上に置いた。

少時して振りかへると、徒歩で馬のさきに立つて行く少年の姿が、黑く夕闇をとほしておぼろに見える。

私は、つと感涙をおぼえて、眼がしらが熱くなるのを感じた。彼は馬をいたはつて、三里の路を徒歩で歸るのだ。しかも此の暮夜の寂しい湖畔の一本路を、――と思ふと、私は感謝に似た心さへ湧いた。少年の提げてゐる提灯が、あかく遙かに木の間がくれに見られた。私は案内者のあとからすた〳〵と足音をたてながら、大棚山林の伐採事務所に急いだ。

三　今

市島春城
名は謙吉
文學者
新潟縣の人
萬延元年（一八六〇）生

市島春城

私はいくら字書を繙いて見ても、「今」といふ字より、より以上の力強い字を發見することが出來ない。古來の賢哲、能く百代の師たり、萬世の範たる金言を遺したと言つても、「今」といふ語以上に力強い語を案出した者はない。正にこれ匕首肺肝を穿つの語である。人生唯「今」あるのみ。昨日は去れる「今」であり、明日は來らんとする「今」である。回顧は過去つた事に對するものであり、豫想は假設であつて、我等にあるものは唯「今」のみである。日月は移り、動植物は代謝し、天地は須臾も息まない。そして刻一刻推移し行く「今」こそ宇宙の本體である。

これを我等の日常に見るも、「今」といふ瞬間程大切な時はな

い。事の成るのも「今」にある。この瞬間こそ髓の底までも振るひ起す力がある。「今」の外に既往と未來とがあるかに見えるが、畢竟、既往は「今」の葬られた殘骸であり、未來は「今」のまだ生まれない陰影であつて、其所には何物もない。既に葬られた既往を語るのは、死兒の年を數へる樣なものであり、まだ生まれない來年を語れば鬼が笑ふと言はれてゐる。既往は追ふべくもなく、未來は期し難い。唯根强く迫り來る力は、「今」といふ一瞬にあるのだ。既往に善なるもの偉なるものがあつたとしても、それはその當時の「今」に於て成つたものだ。更に再び善なるもの偉なるものを求めようと欲したならば、「今」これを爲す外はない。

今日しなくても明日あると言ふが如きは、天地不息の大道

に背くものである。これを未來に期すと言ふ如きは、永へにこれを失ふと言ふに同じい。特に未來といふ別境地の存するものではない。「今」――現在の推移――これやがて未來である。未來に期すと言ふのは、畢竟、薄志弱行者の遁辭に過ぎぬ。未來などいふ空虛を假定するのは愚である。何ぞ直ちに起つて今これを爲さざる。期し難い假定に遁れるのは、その優柔怯懦を自白するものでなくて何であらう。

故に、私は全力を「今」の一字に注ぎ、斷乎として「今」の一瞬を守る。一人の生涯、一國の運命、唯「今」に全力を傾注するに於て、始めて大成が期し得られるのである。「今」を外にして競爭場裡に立つ事は難い。鬪は「今」である。勝敗は「今」の一瞬にある。「時は今」と叫ぶ時、其所に果斷の決心があり、剛健の意氣があり、

黑田如水
名は孝高
豐前國（大分縣）中津城主
慶長九年（一六〇四）歿
年五十九

豐太閤
豐臣秀吉

千宗旦
利休の孫
茶人
萬治元年（一六五八）歿
年八十一

大德寺
臨濟宗大德寺派本山
京都市上京區紫野大德寺町にある

直截の邁進があり、奮闘の努力があり、その間一毫の惰容を赦さぬ。かくして全力の發動となり、渾身の熱血となり、精神一到して大事が成るのである。私は一意「今」を禮讃する。

昔、黑田如水は豐太閤の偉業を思つて、或時問うた。「殿下の成功には必ず祕訣があるでありませう。願はくはそれを承りたい。」と。豐公は笑つて、「別に祕訣はない。唯、過去を追はず、未來を慮らず、今日一日の事業を一心不亂に爲したに過ぎぬ。」と答へられたとあるが、豐公も「今」の禮讃者である事が知られる。英雄豪傑の事業も、「今」の成功の積まれたものであるのだ。

私は「今」といふに因んで、更に茶人千宗旦の一遺事を語らう。

宗旦が新に茶室を建てた折、豫て別懇の大德寺の名僧清巖和尚が、多分普請も落成に及んだであらうと尋ねて來た。宗

清巖和尚
近江國（滋賀縣）の人
寛文六年（一六六六）歿
年七十二

旦は悅んで迎へ、「普請は漸く成つた。どうか庵號を考へて下さい。」と言つた。清巖は「いかにも尤もの事だ。併し、何ぞ好みはないか。」と問うた。宗旦は暫く考へ、「古語に『懈怠比丘期明日』とあるが、いかにも面白く思ふ。」と言ふと、清巖は打頷き、「成程面白い。人間の生涯は明日も知れぬ事だから、庵號を『今日庵』とされてはどうか。それでよければ額字は揮毫しよう。」と言ふと、宗旦はひどく悅んだ。さて種々の物語に時も移つたので、清巖が暇乞して去らうとすると、宗旦は引留め、「今此所で額字御揮毫を。」と需めた。すると和尚「いや、それは餘りに倉卒。追つて認めて進じ申さう。」と言ふのを、宗旦「然樣にては今日庵の意にかなはず。只今此所ですぐお書き下されてこそ今日庵だ。」と言ふと、清巖も尤も至極と筆紙を求めたが、卽座に唐紙や

筆を辨じかねた。紙は僅かに障子の張殘りを見出したけれど、筆のないのに當惑した。折柄、傍にゐた妻女が眉掃を取出し、「こんな物で間に合ひますなら」と言ふに任せ、清巖は立所に「今日庵」の三字を書いた。これが千家に名高い額面である。

清巖が揮毫を果して歸院すると、程なく宗旦から使があつて、「茶を進ぜたう御座いますから、只今すぐお出でを願ふ」とあつた。清巖は不審を抱き、つい今まで話してゐて、そのをり何のさたもなかつたのに、妙な事だと思ひながら、直ちに出掛けると、先刻書いた額面は針で留めて壁に掲げてあつて、宗旦は茶室開きの茶を點てた。その日を越さず、即日茶を振舞つた所に宗旦の趣向があるので、今日庵といふ以上は、かくなければならぬと、清巖も感に入つたとの事である。（春城筆語）

杉田玄白
名は翼
蘭學者　醫師
若狹國（福井縣）小濱藩醫
文化十四年（一八一七）歿
年八十五
曲淵甲斐守
名は景漸
幕臣
大阪町奉行
江戸町奉行
明和・天明頃の人
千住
今の東京市荒川區南千住町
山脇東洋
名は尚德
禁裏醫官
寶曆十二年（一七六二）歿
年五十八

二四　蘭學事始

杉田玄白

この節、不思議に、かの國の解剖書の手に入りしことなれば、まづその圖を實物に照らし見たしと思ひしに、實にこの學開くべきの時至りけるにや、そも〳〵頃は三月三日の夜と覺えたり、時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能萬兵衞といふ男より、手紙もて知らせしは、「明日手醫師何某といへる者、千住小塚原にて腑分致す由なり。御望あらば、かしこへ罷りこされよかし」とのことなり。豫て、同僚小杉玄適といふ者、その以前京師の山脇東洋先生の門に遊び、かの地にありし時、先生の企にて觀臟の事ありしに、此の男に從ひ行きて親しく見たるに、「古人の諸說皆空言にて、信じ難きことのみなり。上古は九臟と

臟志
解剖書
寶暦九年(一七五九)刊行
翁
杉田玄白

稱せり、今五臟六腑の目を分かちたるは後人の杜撰(ッザン)なり」なんどいへることの話もありし。その時、東洋先生、臟志といふ著書をも出し給ひたり。翁その書をも見し上のことなれば、よきをりあらば、翁もみづから觀臟したしと思ひゐたりき。此の時、和蘭解剖の書も始めて手に入りしことなれば、照らし見て、いづれかその實否を試むべしと喜び、一方ならぬ幸の時至れりと、かしこへ罷りこしたる心にて殊に飛揚せり。

杉田玄白木像

さて、かゝる幸を得し事を、獨り見るべき事にもあらず、朋友のうちにも家業に篤き同志の人々へは知らせ遣はし、同じく

淳庵
中川淳庵
名は純安
蘭學者　醫師
幕府の醫官
天明六年(一七八六)歿
年四十八
前野良澤
名は嘉
蘭學者　醫師
豐前國(大分縣)中津藩醫
享和三年(一八〇三)歿
年八十一
山谷町
今の東京市淺草區淺草觀音堂の北方
その墓朝
明和八年(一七七一)三月五日

見て、業事の益には相互になしたきものと思ひ量りて、まづ同僚中川淳庵をはじめ、誰彼と知らせ遣はせし中に、前野良澤へも知らせたり。さて、良澤は翁よりも齡十ばかりも長じ、老輩のことにてありし故、相識にこそあれ、常々は往來も稀に、交疎かりしかど、醫事に志篤きは互に知りあひたる中なれば、この一擧に洩らすべき人にはあらず。先づ早く申し通じたく思ひたれども、夜分にはなりぬ。俄に知らすべき便りもなし。如何せんと存ぜしが、臨時の思付にて先づ手紙調へ、辻駕籠の者をやとひ、「明朝しかく〳〵の事あり。望あらば早天に淺草三谷町出口の茶屋まで御越あるべし。翁も其處まで罷り越し、待合はすべし」と認め、持たせ遣はしけり。その翌朝、とく支度整へ、彼所に至りしに、良澤參りあひ、その餘の朋友も皆々參會

ターヘルーアナトミア
解剖圖譜の意
著者蘭人キユルムス

し、出迎へたり。

時に良澤、一つの蘭書を懷中より出し、披き示して曰く、「これはこれ、ターヘルーアナトミアといふ和蘭解剖の書なり。先年長崎へ行きたりし時、求め得て歸り、家藏せしものなり。」といふ。これを見れば、卽ち翁がこの頃手に入れし蘭書と同書同版なり。これまことに奇遇なりとて、互に手を拍ちて感ぜり。さて、良澤、「長崎遊學の中、かの地にて習ひ得、聞きおきたり。」とて、其の書を披き、「これはロングとて肺なり。これはハルトとて心なり。マーグといふは胃なり。ミルトといふは脾なり。」と指し敎へたり。然れども、漢說の圖には似るべくもあらざれば、誰も直に見ざるうちは、心中にいかにやと思ひしことにてありき。

これより各、うちつれだちて、小塚原の設けおきし觀臟の場へ到れり。其の日、屠者俄に病氣の由にて、其の祖父なりといふ老屠、代りて出でたり。かの老屠、かれのこれのと指し示し、心・肝・膽・胃の外に、その名なきものを指して、「名は知らねども、己若きより數人を手にかけ解分けしに、いづれの腹內を見ても、此處にかやうの物あり、彼處にこの物あり。」と示し見せたり。圖によりて考ふれば、後に分明を得し動血脈の二幹、また小腎などにてありたり。良澤と相俱に携へ行きしオランダ圖に照らし合はせ見しに、一として些か違ふことなき品々なり。古來醫經に說きたるところとは大いに異なり。官醫岡田養仙老・藤本立泉老などはその頃まで七八度も腑分し給ひし由なれども、皆千古の說と違ひし故、每度々々惑疑して不審開け

ず、その度々に異狀と見しものを寫しおかれ、「つら〳〵思へば、日華人物違ありや。」など著述せられし書を見たることもありしは、これが爲なるべし。

歸路は良澤・淳庵と翁と三人同行なり。その途中にて語り合ひしは、「さて〳〵今日の實驗一々驚き入る。且これまで心づかざるは恥づべきことなり。苟も醫の業をもつて互に主君主君に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今まで一日々々と此の業を勤め來りしは、面目もなき次第なり。何とぞこの實驗に基づき、大凡にても身體の眞理を辨へて醫をなさば、この業をもつて天地間に身を立つる中譯もあるべし。」と、共々に歎息せり。良澤も「げに尤も千萬、同情のことなり。」と感じぬ。その時、翁申せしは、「何卒こ

のターヘルアナトミアの一部を新に飜譯せば、身體內外のこと分明を得、今日療治の上に大益あるべし。いかにもして通詞等の手をからず、讀みわけたきものなり。」と語りしに、良澤曰く、「予は年來蘭書を讀みだしたき宿願あれど、これに志を同じうする良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各、方いよ〳〵これを欲し給はば、我、前の年長崎へも行き、蘭語も少々は記憶しをれり、それを種として、共々讀掛るべしや。」といひけるを聞き、「それはまづ喜ばしきことなり。同志に力を協せ給はらば、憤然として志を立て、一精出し見申さん。」と答へたり。良澤、これを聞き、喜悅斜ならず、「然らば、『善はいそげ』といへる俗說もあり。直ちに明日私宅へ會し給へかし。いかやうにも工夫あるべし。」と深く契約して、その日は各、宿所々々へ

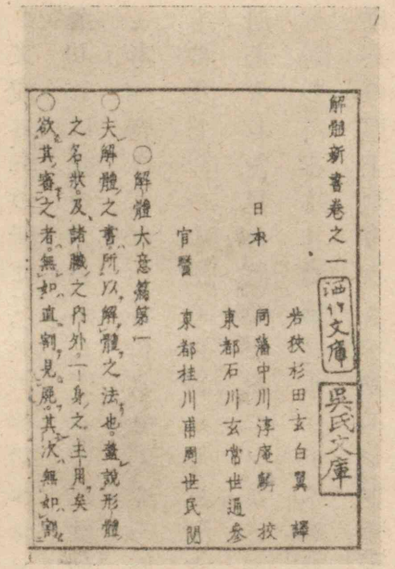
別れ歸りたり。

其の翌日、良澤が宅に集り、前日のことを語り合ひ、先づ彼のターヘルアナトミアの書にうち向かひしに、誠に艫舵なき船の大海に乘出せしが如く、茫洋として寄るべきなく、唯あきれにあきれて居たる迄なり。されども、良澤は豫てより此の事を心に掛け、長崎迄も行き、蘭語竝びに章句・語脈の間の事も少しは聞覺え、聞習ひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁はいまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、漸くに文字を覺え、彼の諸言をも習ひしことなり。

偖、此の書を讀み、いかやうにして筆を立つべきかと談じ合ひしに、とても初より内象の事は知れがたかるべし、此の書の

解體新書
我が國最初の西洋解剖學譯書
安永三年(一七七四)刊行

最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。其の名處は皆知れたることなれば、其の圖と說の符號を合はせ考ふることは、取りつきやすかるべし。圖の初とはいひ、かたくゝ先づこれより筆を取始むべしと定めたり。即ち解體新書形體名目篇これなり。其の頃は、助語の類も何れが何やら心に落ちつきて辨へぬことゆゑ、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば「眉といふものは目の上に生じたる毛なり」。


解體新書卷之一
西山文庫
吳氏文庫
芳洲杉田玄白翼譯
同藩中川淳庵駰校
日本
東都石川玄常世通參
官醫
東都桂川甫周世民閲
○解體大意篇第一
○夫解體之書所以解體之法也蓋就形體之名狀及諸職之內外一身之主用矣
○欲其審之者無如直制見屍其次無如觀

解體新書

とあるやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らめられず。日暮るる迄考へ詰め、互ににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得ることならぬ程にてありしなり。

又或日、鼻の所にて、「フルヘッヘンドせしものなり。」とあるに至りしに、此の語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。其の頃辭書といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小册ありしを見合はせたるに、フルヘッヘンドの譯註に、「木の枝を斷ちたる跡、其の跡フルヘッヘンドをなし、又庭を掃除すれば、其の塵土聚りフルヘッヘンドす。」といふやうに讀出せり。これは如何なる意味なるべきかと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へ兼ねたり。時に翁「思ふに、木の枝を切りたる跡癒

連城の璧
惠王之珠、光能照レ乘、和氏之璧、價重ニ連城一。（成語考）

シンネン　オランダ語で精神の意

ゆれば堆くなり、又掃除して塵土集ればこれも堆くなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、フルヘッヘンドは堆といふことなるべし。然れば此の語は堆と譯しては如何」といひければ、各、これを聞きて、「甚だ尤なり、堆と譯さば適當すべし。」と決定せり。其の時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の璧をも得し心地せり。

此の如き事にて、推して譯語を定めたり。其の數も次第次第に增しゆくこととなり、良澤のすでに覺え居し譯語書留をも增補しけるなり。其の中にもシンネンなどいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及びがたきことも多かりし。これらは亦ゆく〳〵は解く可き時も出で來ぬべし。先づ符號を附け置くべしとて、丸の中に十文字を引きて記し置きたり。

其の頃知らざることをば轡十文字と名づけたり。毎會いろいろに申し合はせ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、其の苦しさの餘り、それも又轡十文字、轡十文字と申したりき。然れども「爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にあり」。の喩の如くなるべしと、此の如く思を勞し、精を研り、辛苦せしこと一箇月に六七回なり。其の定日は怠なく、わけもなくして各、相集り、會議して讀合ひしに、實に「不昧者は心」とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く增し、讀むに隨ひ自然と彼の國の事態も了解するやうにて、後々は其の章句の疎き所は、一日に十行も、其の餘も、格別の勞苦なく解し得るやうにもなりたり。尤も毎春參向の通詞どもへも聞糺せしこともあり。又其の間には解屍の事もあり、又獸畜を解きて見合はせし事も度々のことなりき。

此の會業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加り寄りつどふことなりしが、各、志す所ありて一樣ならず。翁は一たび彼の國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差あることを知明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく、一日もはやく此の一部を用立つやうになし見たしと志を起せし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する所は其の夜飜譯して草稿を立て、それに就きては、其の譯述の仕方を種々樣々に考へ直せし事、四年の間に草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すに至り、遂に解體新書飜譯の業成就したり。

蘭學事始
二卷
解體新書飜譯の苦心を中心とする回想錄

二五　國語の愛護

五十嵐力
國文學者
文學博士
早稲田大學教授
米澤市の人
明治七年生

五十嵐　力

こゝに獨立した一つの國があつて、其の國をそのまゝ維持して行き、或は更に進んで一層立派なものに仕上げて行くについて、國民の愛護して行かなければならないものが澤山あるかと考へます。先づ第一には國體でありませう。次いでは國民が祖先から傳へられた淳風美俗でありませう。或は建築・繪畫・彫刻その他の古藝術もありませう。或は山水その他の自然美もありませう。或は又その國の特産といふやうな天産物もありませう。その他いろ〳〵の物がありませうが、國語といふもの、――我々が祖先から傳へられ、思想傳達の機關として片時も缺くことのできない國語といふものも、國民の愛護しなければならない最も大切なものの一つであらうと考へます。

人によつては、それほど國語に重きを置かないで、「我々の重んずべきは思想である、實體である。言葉は思想・實體を現す一つの符牒・形式に過ぎない、一種の表現方便に過ぎない。かかる表現の形式や方便に骨を折るのは愚なことである。」と考へるかも知れません。又さういふ人が實際かなり多くあるやうにも思はれます。併しながら、これは片手落の理窟といふもので、事實に於ては、「表現卽ち實體である、言葉卽ち思想である。」とさへ言つてもよいかと思はれます。少くとも表現が實體の半分であるとくらゐには考へることができませう。亞米利加の有名な詩人で哲學者であるエマースンは、「人とい

エマースン
アメリカの詩人・評論家
(1803―1882)

ふものは、たゞ半分だけが自分で、他の半分は自分の表現だ。」と言ひました。

我々が人から「汝は何者ぞ。」と問はれた時に、先づ思ひ浮かべるものは、自分の現れたものでありませう。そして自分の姓名・職業・資格・住所・事業などを以て答へるでありませう。自分自身の現れである姓名・職業・資格、乃至服裝・住宅・庭園・言語・文章・藝術などを除外して、何處に我といふものがありませうか。また國自身の現れである國土・山川・都會・田舍・諸制度・諸設備・諸藝術を除いて、何處に國といふものがありませうか。世の中には異を樹てることを好む詭辯者があつて、よく「表現の樣式や外形などに支配されてたまるものか。衣服は寒暑が凌げれば澤山だ、言葉は思ふことが言へれば澤山だ。」などと申しま

伊藤仁齋
名は維楨（これさだ）
儒者
京都の人
寶永二年（一七〇五）歿
年七十九

芭蕉
松尾芭蕉
名は宗房
俳人
伊賀國（三重縣）の人
元祿七年（一六九四）歿
年五十一

アッシジ
イタリヤの都邑
フランシスの生地

フランシス
イタリヤの聖者
フランシス僧團の創設者
（1182—1226）

すが、事實に於て、內容と形式とはそんなに手輕に引離せるものではありますまい。伊藤仁齋は井戸浚（かへ）の場合にも袴を著けずには居られず、芭蕉は笠一蓋、杖一本でなければ心が落著かず、アッシジのフランシスは破れ著物に繩の帶を締めなければ安んじなかつたのであります。そして其の袴姿・笠杖姿・繩帶姿に、彼等めい〳〵の人物が最も鮮かに最も的確に現れて居ると思ひます。かう考へると、「表現卽ち實體」とまでは言はないでも、「表現卽ち實體の半ば」とくらゐは言つても差支がなからうと思ひます。

表現はかやうに意味の深いものであります。特に言葉について見ると、言葉は其の人の人と爲りを現す所以のものであります。其の人の人格・嗜好を現し、また其の人の過去をも

現在をも、時としては未來をも現すものであります。隨つて言葉は自分に對し、又他人に對して、深く大いなる影響を及すもので、其の表現上の用意・嗜次第で、自分の品格を高め運命を開拓することもでき、また之によつて他人に好感を與へ、延いては社會を利し、文化の向上に貢獻することもできるのであります。言葉などいふと如何にも小さい事のやうに聞えますが、事實は決してさうでありません。道元禪師は「愛語能く廻天の力あることを學すべきなり」と說いてゐますが、これは實に簡單なうちに、言葉の靈力を力强く道破した一句であると思ひます。

道元禪師
我が國曹洞宗の開祖
建長五年（一九一三）歿
年五十四

このやうに言葉といふものは、人間生活の上に大きな力を持つものである上に、國語といふものは祖先から傳へられた

一つの寶物で、大切な財產でありますから、之を立派に維持して、なるべく豐富にし善美にするのが、子孫たる我々の義務であります。又我々の言葉を立派に護り立てるのが、取りも直さず我々個人めい〳〵を立派にする所以であり、同時に國を輝かす所以でもあります。それでは亂脈を極めてゐる現在の國語に對しては、どうすればよいかといふに、大體四つの方針に歸します。即ち第一には、語法・文法に合つた、少くとも正しい言葉にすること、第二には、正しきが上に更に之を美しく磨き上げること、第三には、正しい美しいといつても、自ら狹く限るといふことでは面白くないから、自分の本領・基調をちやんと立てて、之に合し得る限り、なるべく多くの要素を取入れて、豐かな姿のものに生し立てること、第四には、豐かなうちに

統一のあるものに發達させること、此の四つで、此の標準により、我が國語を正しくし、美しくし、豊かにし、纏りのあるものにして、國民生活の有力な表現たらしめると同時に、又之によつて國民生活そのものを向上發展させて行くことが必要であると思ひます。

（國語の愛護）

新制國語　卷四　終

文部省檢定濟
昭和十三年十二月二十日　中學校國語科用

昭和十三年八月一日印刷
昭和十三年八月十日發行
昭和十三年十二月十日訂正再版印刷
昭和十三年十二月十五日訂正再版發行

新制國語　全十册
定價　卷一—八　金六拾錢
　　卷九—十　金五拾五錢

編者　廣島高等師範學校附屬中學校
　　國語漢文研究會
　　代表者　清水治郎

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目二十五
　　合資會社　東京修文館
　　代表者　鈴木金之助

發行所　大阪市東區博勞町五丁目五十六
　　株式會社　修文館
　　代表者　鈴木常松

發行所　東京市神田區神保町一丁目二十五
　　振替口座東京二六四四番
　　合資會社　東京修文館
　　大阪市東區博勞町五丁目五十六
　　振替口座大阪四七一一番
　　株式會社　修文館

檢定濟　中學國語　修文館　印

二北永岡偉之